東京大学総合研究博物館所蔵千葉市出土縄文時代人骨

水 嶋 崇一郎
諏 訪 元

はじめに

本報告書は、東京大学総合研究博物館に所蔵されている縄文時代人骨のうち、千葉市から出土したものについて、その基礎情報を報告するものである。

東京大学総合研究博物館所蔵の縄文時代人骨コレクションの概要は、同館標本資料報告第三号「東京大学総合研究資料館収蔵日本縄文時代人骨型録」(遠藤・遠藤 1979)にまとめられている。我々はこのカタログに則しつつ、同コレクションについて、現存状態の確認と再整理、関連情報の整備、そしてデータベース化を実施してきた。今回は、上記によって再編された千葉市出土標本群について新たに調査分析を加え、それらの概要と個体骨の年齢・性・時代区分構成をまとめた。加曽利貝塚と向ノ台貝塚の出土人骨については近年の記載報告があるが(青沼・松村 2000、木村 2002)、今回の調査において個体骨特定の再確認と更新を行なった。そのため、これらの更新点についてまとめた。

また、各遺跡ならびに本館収蔵標本の発見と収集の経緯をまとめた「調査・収集史」ならびに各個体骨標本の保存整理状況を記録した「データシート」を本報告書の補足資料として掲載する。これらは同館の標本資料報告第61号と第69号(水嶋 他 2006、水嶋・久保 2007)のうち、千葉市所在遺跡に関する内容を転載したものである。

所蔵標本の概要

遺跡ごとの標本数、個体骨数、調査年、発掘者、関連文献を表1に示す。千葉市出土の縄文時代人骨は8遺跡90標本あり、51体分の個体骨とその他の部分・断片骨からなる。加曽利貝塚・矢作貝塚出土標本が全標本数の約7割、加曽利貝塚出土標本が全個体骨数の約6割を占める。これらの遺跡のうち、特に矢作貝塚において標本数と個体骨数との差が顕著である。これは、当時、地元の人により15体程の個体骨が一旦は発掘されたものの、箱に一括して埋め戻され、のちに東京大学人類学教室が混在人骨として再発掘した経緯によるものである。

個体骨の構成

個体骨の年齢・性構成を表2に示す。成人骨としては42体分が含まれており、全個体骨数の約8割を占める。このうちの21体は男性、19体は女性と判定され、男女の割合はほぼ等しい結果となった。未成人骨としては9体分が含まれており、全個体骨数の約2割を占める。これらの未成人骨の年齢構成は、胎児期が1体、新生児・乳児期(0～1歳)が2体、幼児期(1～6歳)が3体、学童期(6～12歳)が3体である。

個体骨の時代区分構成を表3に示す。伴出土器の型式情報のみに基づいた場合、縄文時代早期に属する個体が4体、中期の個体が7体、後期の個体が21体、時代区分不明の個体が19体であった。時代区分不明の19体分については、貝塚形成時期から後期の個体が9体、中期から晩期の個体が10体と判断される。従って後期人骨を主体とした構成であり、前期の個体骨は見られない。

加曽利貝塚調査団発掘人骨の再同定と新規追加標本

1964年から1967年にわたる加曽利貝塚調査団の一連の発掘により、加曽利北貝塚で13体、加曽利南貝塚で31体、計44体分の人骨が発見された。報告書作成時、北貝塚人骨には第1号から第13号、南貝塚人骨には第1号から第31号までの番号が与えられた(後藤 1976、1977)。 東京大学総合研究博物館の所蔵人骨については、近年、木村(2002)による保存状況の確認調査が行なわれ、北貝塚出土の第1、2、4、6、7、8、9、10、12号(計9体)、南貝塚出土の第1、2、3、5、6、7、9、10、13、16、17、18、19号(計13体)との対応付けがなされた。

本調査では、他の遺跡出土標本の再整理方法と統一的な情報化を加曽利貝塚出土標本についても実施したため、木村(2002)による調査整理状況を基に、さらに詳細な検討を加えることとなった。特に、東京大学総合研究博物館所蔵の発掘時写真を新たに精査再検討し、個体の特定を再度確認した(表4)。結果、北貝塚出土の個体骨2体分についての評価が木村(2002)と異なり、本調査では、第12号とされた標本が第2号の一部であること、鈴木他(1976)以来第8号とされた標本が実際には第3号であることを見出した。南貝塚出土人骨については木村(2002)からの変更点はない。

また、今回、加曽利貝塚調査団の南貝塚の発掘に由来する標本3点を新たに特定した。これらの標本は、いずれも胎児もしくは乳児骨であり、他の加曽利貝塚出土標本とは別箇所に保管されていたことから、遠藤・遠藤(1979)と木村(2002)に収録されなかったものと考えられる。これら3標本の詳細は以下の通りである。

・加曽利南15

付属紙片に「人骨 第15号 1964. 9. 25 第6トレンチ 66-47」と記されており、発掘時の第15号人骨(後藤 1976)と考えられる。頭蓋骨は部分的であるが四肢体幹骨は全体的に残存し、保存状態は良好である。歯牙(di×5、dm×1)の形成段階からおよそ0歳の新生児と判定された。出土地点は発掘時の第VIトレンチ3区に位置し、縄文時代後期中葉(加曽利B式)に属する(後藤 1976)。

・加曽利南20

付属紙片に「第6 tre 3区 66-46 第20号人骨 10/19 南20(木村命名)」と記されており、発掘時の第20号人骨(後藤 1976)と考えられる。主として部分的な頭蓋骨、右鎖骨、左右肩甲骨、右寛骨が残存し、保存状態は良好である。歯牙(di×7、dc×4、dm×1)の形成段階から出生後6ヶ月程度の乳児と判定された。出土地点は発掘時の第VIトレンチ3区に位置し、縄文時代後期中葉(加曽利B式)に属する(後藤 1976)。

・加曽利南21

付属紙片に「千葉 加曽利南 小児骨 南21(木村命名)」と記されており、発掘時の第21号人骨(後藤 1976)と考えられる。部分的な頭蓋骨のほか、右大腿骨と左右腓骨を除いた四肢骨が残存し、保存状態は良好である。四肢骨骨幹部の長さから約7、8ヶ月の胎児と判定された。出土地点は発掘時の第IVトレンチ2区に位置し、縄文時代後期前葉(堀之内1式)に属する(後藤 1976)。

向ノ台貝塚人骨の記載報告

向ノ台貝塚の個体骨4体は、縄文時代早期に属すると考えられており、比較的希少な人骨の出土例と言える。これらの人骨は、青沼・松村(2000)の記載報告の後、東京大学総合研究博物館の諏訪元・高橋昌子が土塊中の人

骨片(頭骨片や歯牙等)を新たに抽出・検討し、同定と個体分けを更新した。ここでは改めて残存・保存状態を記録し、比較的保存程度の良い一部の四肢骨について計測値を提示することとした。

・UMUT130098(辺田1)

頭蓋骨片、左上腕骨片、左右大腿骨片が残存する。下顎左I2を除いた揃いの良い歯牙(I×7、C×4、P×8、M×12)が含まれる。新たに顎骨片、一部の歯牙、左上腕骨片が追加された。全体的に骨表面の腐食が著しく保存状態は悪い。四肢骨のサイズから女性個体と判定された。縄文時代の女性としては上腕骨・大腿骨の骨幹部の扁平性が強い。

・UMUT130099(辺田2)

頭蓋骨片、左右上腕骨片、左右大腿骨片、左右脛骨片が残存する。部分的な歯牙(I×1、C×2、P×4、M×11)が含まれる。新たに頭骨片と一部の歯牙が追加された。全体的に骨表面の腐食が著しく保存状態は悪い。四肢骨のサイズから女性個体と判定された。縄文時代の女性としては大腿骨・脛骨の骨幹部の扁平性が強い。

・UMUT130100(辺田3)

左右上腕骨片、左右尺骨片、左右大腿骨片が残存する。全体的に骨表面の腐食が著しいが、左上腕骨の骨幹部では保存状態がやや良好である。四肢骨のサイズから女性個体と判定された。大腿骨の柱状性は上記の2標本よりも弱く、縄文時代の女性として平均的な発達度である。

・UMUT130101(辺田4)

左右上腕骨片、右橈骨片、左右大腿骨片、左右脛骨片、右腓骨片が残存する。上記の3標本と比較して全体的な保存状態は良い。四肢骨のサイズと形態から男性個体と判定された。右大腿骨、右脛骨の骨幹中央部と推測される位置で次の計測値を得た。大腿骨内外側径 25.6 mm、大腿骨前後径 27.3 mm、柱状示数 106.6、脛骨内外側径 20.2 mm、脛骨前後径30.2 mm、脛骨横断示数 66.9。以上の外径値は、縄文時代人男性の変異(瀧川, 2006)においてきわめて華奢な傾向を示す。柱状示数は縄文時代人男性の全国平均値(114.9)を下回り、女性の変異に収まる。一方で脛骨横断示数は縄文時代人男性の全国平均値(66.7)に類似する。

(東京大学大学院理学系研究科生物科学専攻)
(東京大学総合研究博物館)

引用文献

青沼道文・松村博文
2000 向ノ台貝塚. 千葉県史料研究財団編「千葉県の歴史」資料編 考古1(旧石器・縄文時代) 県史シリーズ 9, pp:296-297. 千葉県.
遠藤美子・遠藤萬里
1979 「東京大学総合研究資料館収蔵日本縄文時代人骨型録」東京大学総合研究資料館標本資料報告第三号.
木村 賛
2002 「加曽利貝塚人骨の総合調査」貝塚博物館研究資料第6集. 千葉市立加曽利貝塚博物館.
後藤和民
1976 加曽利南貝塚人の埋葬. 杉原荘介編「加曽利南貝塚」pp:192-205. 中央公論美術出版.

1977　加曽利北貝塚人骨の埋葬. 杉原荘介編「加曽利北貝塚」pp:204-213. 中央公論美術出版.

酒詰仲男

1951　地形上より見たる貝塚―殊に関東地方の貝塚について―. 考古学雑誌 37:1-14.

2001　「貝塚に学ぶ」学生社.

雑報

1944　仮指定千葉市矢作貝塚の発掘. 人類学雑誌 59:197.

鈴木 尚・木村賛・馬場悠男

1976　加曽利貝塚発掘の人骨. 杉原荘介編「加曽利南貝塚」pp:206-225. 中央公論美術出版.

瀧川 渉

2006　四肢骨の計測的特徴における縄文人と現代日本人の地域間変異. Anthropological Science (Japanese Series) 114: 101-129.

武田宗久

1953　原始社会. 千葉市誌編纂委員会編「千葉市誌」pp:14-86. 千葉市.

水嶋崇一郎・久保大輔

2007　「縄文時代人骨データベース 4) 千葉県の遺跡(向ノ台、矢作、余山など)」東京大学総合研究博物館標本資料報告 69.

水嶋崇一郎・佐宗亜衣子・久保大輔・諏訪 元

2006　「縄文時代人骨データベース 3) 千葉県の遺跡(堀之内、加曽利、曽谷など)」東京大学総合研究博物館標本資料報告 61.

八幡一郎

1924　千葉県加曽利貝塚の発掘. 人類学雑誌 39:209-212.

Krogman, W. M.

1962　The Human Skeleton in Forensic Medicine. Springfield, Charles C. Thomas.

Scheuer, L. and Black, S.

2000　Developmental Juvenile Osteology. Academic Press, London.

Ubelaker, D. H.

1989　Human Skeletal Remains: Excavation, Analysis, Interpretation. Washington D.C., Taraxacum.

表1 所蔵標本

遺跡		標本数	個体骨数	調査年	発掘者	出土報告文献	人骨記載報告
荒屋敷貝塚		1	1	不明	不明	なし	なし
千葉貝塚		1	0	不明	不明	なし	なし
台門貝塚		1	0	1957?	内田文宏?	なし	なし
長谷部貝塚		5	2	1947、1949	酒詰仲男、東大人類学教室	なし	なし
加曽利貝塚		32	31				
	加曽利('07)	1	1	1907	東大人類学教室	八幡(1924)	木村(2002)
	加曽利('23)	2	2	1923	上羽貞幸	八幡(1924)	木村(2002)
	加曽利('24)	3	3	1924	小金井良精 他	八幡(1924)	木村(2002)
	加曽利南	18	17	1964～1965	加曽利貝塚調査団	後藤(1976)	鈴木 他(1976)、木村(2002)
	加曽利北	8	8	1965～1967	加曽利貝塚調査団	後藤(1977)	鈴木 他(1976)、木村(2002)
草刈場貝塚		7	6				
	草刈場('42)	6	5	1942	東大人類学教室	酒詰(1951、2001)	なし
	草刈場	1	1	不明	不明	なし	なし
向ノ台貝塚		6	4	1946～1947	東大人類学教室・千葉中学校	武田(1953)	青沼・松村(2000)
矢作貝塚		37	7	1944	東大人類学教室	人類誌雑報(1944)、酒詰(2001)	なし
	計	90	51				

加曽利貝塚と草刈場貝塚については調査・収集ごとの詳細を記した。

千葉貝塚(現在の貝塚町貝塚群)の1標本については、貝塚群内のいずれの遺跡から出土したものか不明であったため旧称のまま記した。

遠藤・遠藤(1979)には千葉市所在の蕨立貝塚出土の2標本が登録されているが、現在標本の所在が不明であるためここには記さなかった。

表2 個体骨の年齢・性構成

遺跡	個体骨数	成人骨数	成人骨の男女数			未成人骨数	各未成人骨の推定年齢
			男	女	不明		
荒屋敷貝塚	1	1	1	0	0	0	
長谷部貝塚	2	2	1	1	0	0	
加曽利貝塚	31	24	14	8	2	7	7～8ヶ月胎児、0歳、6ヶ月、4歳、5歳、8歳、10歳
草刈場貝塚	6	6	2	4	0	0	
向ノ台貝塚	4	4	1	3	0	0	
矢作貝塚	7	5	2	3	0	2	4歳、11～12歳
計	51	42	21	19	2	9	

年齢判定は歯牙萌出状況（Ubelaker, 1989）、四肢骨骨端部の癒合状況（Krogman, 1962）、サイズ情報（Scheuer and Black, 2000）の優先順序に基づいた。

性判定は寛骨の形態、頭蓋骨の形態、四肢骨のサイズの優先順序に基づいた。

表3 個体骨の時代区分構成

遺跡	個体骨数	①伴出土器型式	②伴出土器型式および貝塚形成時期
荒屋敷貝塚	1	中期 1	中期 1
長谷部貝塚	2	不明 2	後期 2
加曽利貝塚	31	中期 6、後期 21、不明 4	中期 6、後期 21、中～晩期 4
草刈場貝塚	6	不明 6	中～晩期 6
向ノ台貝塚	4	早期 4	早期 4
矢作貝塚	7	不明 7	後期 7
計	51	早期 4、中期 7、後期 21、不明 19	早期 4、中期 7、後期 30、中～晩期 10

①伴出土器の型式情報のみに基づいて各個体骨の属する時代区分を決定した。

②上記方法を適用できなかった個体骨19体分に貝塚形成時期を当てはめた。

表4 加曽利貝塚調査団発掘人骨の再同定の結果

	東大保管番号(UMUT)	木村(2002)の整理番号	木村(2002)の同定	今回の同定
北貝塚出土	131051	8	第1号	第1号
	131052	9	第2号	第2号*
	131052	10	第10号	第10号
	131053	11	第12号	第2号*
	131054	12	第4号	第4号
	131055	13	第9号	第9号
	131056	14	第8号	第3号
	131057	15	第6号	第6号
	131058	16	第7号	第7号
南貝塚出土	131059	24	第1号	第1号
	131059	25	—	—
	131060	26	第2号	第2号
	131061	27	第3号	第3号
	131062	28	第5号	第5号
	131063	29	第6号	第6号
	131064	30	第7号	第7号?
	131065	31	—	第7号?
	131066	32	第9号	第9号
	131067	33	第10号	第10号
	131068	34	第13号	第13号
	131069	34	第13号	第13号
	131070	35	第16号	—
	131070	36	第16号	—
	131070	37	第16号	—
	131071	38	第17号	第17号
	131071	39	—	—
	131071	40	—	—
	131072	41	第18号	第18号
	131073	42	第19号	第19号
	—	—	—	第15号
	—	—	—	第20号
	—	—	—	第21号

*北貝塚出土の第2号人骨はUMUT131052と131053に混在していることが今回の写真照合から明らかとなった。

南貝塚出土のUMUT131064、131065については判定を保留した。

南貝塚出土のUMUT131070については写真照合ができなかった。

縄文時代人骨の調査・収集史

以下は、東京大学総合研究博物館標本資料報告第61号と第69号(水嶋 他 2006、水嶋・久保 2007)のうち、千葉市所在遺跡に関する内容を転載したものである。再録に当たっては内容を改変することなく若干の構成変更を行なった。本文中で下線を引いたもの(例えば荒屋敷)は、東京大学総合研究博物館で登録されている標本(群)の名称を表わす。また「保存資料」とは同館所蔵人骨に関連する未発表の文書・写真記録を表わす。

荒屋敷貝塚

所在地:千葉県千葉市若葉区貝塚町

荒屋敷貝塚は北の草刈場貝塚や南の台門貝塚とともに貝塚町の舌状台地上に位置し、いわゆる貝塚町貝塚群の一部をなす遺跡である(後藤, 1974a)。貝層部は環状に近い馬蹄形を呈し、南北約150 m、東西約160 mの範囲に広がっている(西山, 1974)。貝塚の形成は縄文時代中期前半の阿玉台期に始まり、中期後半を経て後期まで続いたとされている(斎木, 2000)。かつては新屋敷貝塚、千葉貝塚、貝塚町貝塚、あらひ(し)き貝塚とも呼ばれ(酒詰, 1959)、周辺地域の貝塚とともに1872(明治5)年より地元の人々に石灰利用の目的で採掘されていたという(上田, 1887)。本貝塚の研究史は斎木(2000)がまとめている。

人骨の収集に関して、酒詰仲男は「日本貝塚地名表」(1959)の中でヒトが出土した旨を記しているが、その所属時代についての情報はない。1975(昭和50)年から1976(昭和51)年の千葉県文化財センターによる調査では、ヒトの上顎左中切歯が得られたが、現代に属するものと判断された(松浦, 1976)。また1977(昭和52)年の同じく千葉県文化財センターによる調査では、中世時代の埋葬人骨1体のほか、縄文時代中期の部分骨2体分が発見された(種田・斎木, 1978、森本, 1978)。

本館には成人個体骨1体分が収蔵されている。

荒屋敷

標本付属の紙片に「荒屋敷 (中期加曽利E) 昭和二十一年十月」と由来が記されている。1946(昭和21)年10月11日、酒詰仲男は三上次男や広瀬栄一らと共に、当時の皇太子と学習院中等部の学生を迎えて荒屋敷貝塚で発掘を行なっている(酒詰, 2001)。時期の一致から、本標本はこの発掘に由来した可能性があるが、人骨出土についての報告はなく、酒詰らは「発掘はあまり有望でないので、即日うちきることに一決した」という(酒詰, 2001)。また伊藤和夫(1959b)は、1947(昭和22)年の出来事として「現皇太子殿下が千葉市荒屋敷貝塚において、東京大学人類学教室の長谷部言人博士、山内清男氏らの指導のもとに発掘に参加された」と記している。記述は1年ずれているものの、これは恐らく上記の酒詰らによる発掘を指すと思われる。しかし、ここにおいても人骨出土の報告はない。酒詰(1959)に記されたヒトが本標本に相当する可能性もあるが、明らかでない。

現在1標本として本館の標本資料報告No. 3に登録。

保存資料:なし

千葉貝塚(貝塚町貝塚群)

所在地:千葉県千葉市若葉区貝塚町

千葉貝塚とは単一の貝塚を指す遺跡名称ではなく、いわゆる貝塚町貝塚群の一部に相当すると解釈できる(山崎, 1893、酒詰, 1959)。現在の貝塚町貝塚群とは、荒屋敷、台門、草刈場貝塚のほか、荒屋敷西、草刈場南、東辺田貝塚等を含め、荒屋敷支谷と高品支谷に挟まれた舌状台地上の遺跡群を総称したものとされている(宍倉, 1974、1976、千葉市, 1976、斎木, 2000)。

古くは山崎直方(1893)による調査報告がある。この中で山崎は「千葉県庁所在の地なる千葉町の東半里許にして都村なるありて其大字貝塚は即所謂千葉貝塚のある所なり」と紹介し、貝塚の規模を「東西二町許南北六七町に余り」(1町は約109 m)と記した。また酒詰仲男は「日本貝塚地名表」(1959)の中で、荒屋敷、台門、草刈場貝塚の異称として千葉貝塚と記している。

人骨の収集に関して、酒詰(1959)は荒屋敷、台門、草刈場の各貝塚においてヒトが出土した旨を記しているが、その所属時代についての情報はない。このほか、荒屋敷貝塚では縄文時代中期の部分骨などが、草刈場貝塚では乳児骨ないしは胎児骨を含む縄文時代人骨が収集されている(種田・斎木, 1978、森本, 1978、酒詰, 2001)。

本館には少なくとも2体分の部分骨が収蔵されている。

千葉

この標本についての発掘報告と記載報告はともにないが、標本付属の紙片に「縄文時代 千葉県千葉市 千葉貝塚」「1321.158 日本石器時代人 千葉市千葉貝塚」と記されている。人骨の収集年や発掘者、発掘地点は明らかでないが、貝塚町貝塚群の何れかの遺跡において収集されたものと考えられる。

現在1標本として本館の標本資料報告No. 3に登録。

保存資料:なし

台門貝塚

所在地:千葉県千葉市若葉区貝塚町

台門貝塚は北の荒屋敷貝塚や草刈場貝塚とともに貝塚町所在の舌状台地上に位置し、いわゆる貝塚町貝塚群の一部をなす遺跡である(後藤, 1974c)。貝層部は馬蹄形を呈していたとされるが、現在では宅地化のためにその大半の旧状が失われている(古内, 2000c)。現在までに縄文時代中期から晩期にわたる土器が確認されている(伊藤, 1959a、酒詰, 1959、後藤, 1974c、千葉市, 1976)。かつては千葉貝塚、貝塚町貝塚、貝殻ベタ貝塚、浜ベタ貝塚と呼ばれ(酒詰, 1959)、周辺地域の貝塚とともに1872(明治5)年より石灰利用の目的で地元の人々に採掘されていたという(上田, 1887)。

本貝塚では1947(昭和22)年に酒詰仲男が踏査を行ない(宍倉, 1976、酒詰, 2001)、その後、武田宗久が「千葉市誌」(千葉市誌編纂委員会, 1953)で紹介したことにより、その存在が一般に知られることとなった。本貝塚の研究史は古内(2000c)がまとめている。

本貝塚において縄文時代人骨が収集されたという報告はない。酒詰仲男は「日本貝塚地名表」(1959)でヒトが出土した旨を記しているが、その所属時代についての情報はない。

本館には部分骨1体分が収蔵されている。

台門

頭蓋骨の内側に「堀内式 一九五七・十一・二十三 内田文宏(72) 五一〇七 千葉貝塚町台門」と由来が記されている。人骨の発掘報告と記載報告はともになく、また本館の標本資料報告No. 3には登録されていない。今回は新規のUMUT番号を設定せず、「台門」の1標本として記録した。

保存資料:なし

長谷部貝塚

所在地:千葉県千葉市緑区平山町

長谷部貝塚は長径約200 m、短径約150 mに広がる馬蹄形貝塚であり、縄文時代中期から後期にわたる土器が確認されている(後藤, 1974a)。周辺地域には台畑貝塚や東水砂第2貝塚など、同時期の遺跡が分布している(古内, 2000a)。

本貝塚は1881(明治14)年に伊沢信三郎により初めて貝塚として認識され、その経緯や出土遺物が加部巌夫により学界に紹介された(加部, 1881)。このことは有識者による千葉県初の貝塚の発見、報告事例として知られている(堀越, 1992a)。本貝塚の研究史は古内(2000a)がまとめている。

人骨の収集に関して、本館保存資料の人類学教室酒詰仲男調査報告(日録5)には「酒詰は昭19. 6. 14日はじめて実査し、6月29

日再訪、更に21年1月22日人骨を得た。その下に住居址の床も発見したが、当時、作物の都合で発掘不可能であった」と記されている。しかし、「貝塚に学ぶ」(酒詰, 2001)によると、1946(昭和21)年に発掘を行なったという記録はなく、1947(昭和22)年1月21日から24日にわたり長谷部貝塚を含む複数の遺跡を踏査、同年2月25日から28日にわたり長谷部貝塚を発掘したことが記されている。人類学教室酒詰仲男調査報告(日録5)にある人骨発見年は誤転記と思われる。その後、1949(昭和24)年の7月9日から15日にかけて、東京大学人類学教室の鈴木尚・渡辺直経・酒詰仲男らにより発掘調査が行なわれた。この発掘では貝塚の南西側にA区からD区の4地点が設けられた。このときのB区は、酒詰が人骨収集の際に発見した住居址の床を目当てに発掘された地点である。A区から人骨1体、C区から胎児骨1体が発見されている(人類学教室酒詰仲男調査報告、日録5)。1959(昭和34)年には、早稲田大学考古学研究室の滝口宏らによりほぼ全掘に近い発掘が行なわれ(後藤, 1974a)、「伸展、屈葬、被甕葬、男女合体葬など各種のめずらしい埋葬様式を持つ三〇数体の石器時代人骨」が発見されたという(千葉県教育委員会, 1969)。このほか、東京大学人類学教室による1949年の発掘以前に、誉田村中学校の一生徒が貝塚の南西側でヒトの脛骨を発見したとの記録がある(人類学教室酒詰仲男調査報告、日録5)。以上の発掘による出土人骨数は35体程度と推算される。

上記のうち本館に収蔵されている標本は、1947年の酒詰仲男および1949年の東京大学人類学教室の発掘によるものと考えられ、少なくとも成人個体骨2体分からなる。

長谷部貝塚

これらの標本についての発掘報告と記載報告はともにないが、人類学教室酒詰仲男調査報告(日録5)と東京大学人類学教室発掘時の実測図(保存資料)が本館に収められている。これらから、本館の成人骨は、1947年の酒詰による発掘と、1949年の東京大学人類学教室による発掘により得られたものと推測される。ただし、上記の通り、人骨発見年は1947年であり、標本資料報告No. 3の年月日欄には、人類学教室酒詰仲男調査報告(日録5)にある誤転記と思われる発見年が記されている。なお各標本がいずれの発掘に由来するか明確にできない。標本資料報告No. 3(遠藤・遠藤, 1979)の備考欄に「postcranial bones, fragments. infans. 1421・141 (HN)」と記されている点から、UMUT130097は東京大学人類学教室の発掘でヒトの胎児骨と判断された標本と思われるが、現存する該当標本は動物の胎児骨であった。

現在5標本として本館の標本資料報告No. 3に登録。

保存資料:人類学教室酒詰仲男調査報告(日録5)

長谷部貝塚発掘実測図(1949年7月)

加曽利貝塚

所在地:千葉県千葉市若葉区桜木町

加曽利貝塚は、北側の環状貝塚(北貝塚、直径約130 m)と南側の馬蹄形貝塚(南貝塚、直径約170 m)から形成される本邦有数の巨大貝塚である。また、加曽利B式、加曽利E式土器の標式遺跡として知られている(山内, 1939-1941)。北貝塚は主として縄文時代の中期後葉、南貝塚は後期前葉から晩期初頭にかけて形成されたものとされている(青沼, 2000)。

本貝塚は1887(明治20)年に上田英吉により紹介され(「下総国千葉郡介墟記」、上田, 1887)、その後、1923(大正12)年の大山史前学研究所による発掘調査で北貝塚と南貝塚が区分され、その規模と形状が明らかとなった(大山史前学研究所, 1937)。翌1924(大正13)年には東京帝国大学人類学教室の松村瞭らがB、D、E地点の発掘を実施し、北貝塚と南貝塚では異なる型式の土器が出土することを認識した(八幡, 1924)。本貝塚の学史的意義は青沼(2000)などに詳しい。

人骨の収集は、東京帝国大学人類学教室の坪井正五郎・石田収蔵・松村瞭による1907(明治40)年の調査に端を発する。その後、1923(大正12)年の上羽貞幸、1924(大正13)年の東京帝国大学人類学教室の松村瞭ら、1936(昭和11)年の大山史前学研究所の大山柏・池上啓介・大給尹・竹下次作、1958(昭和33)年の明治大学考古学研究室の杉原荘介、1962(昭和37)年の武田宗久を中心と

する千葉市教育委員会、1964(昭和39)年から1968(昭和43)年の滝口宏を団長とする加曽利貝塚調査団、1972(昭和47)年の後藤和民を中心とする千葉市教育委員会によって、人骨の収集が行なわれた(八幡, 1924、大山史前学研究所, 1937、芹澤, 1962、宍倉, 1975、後藤, 1976、1977b、1977c、後藤・庄司, 1981)。以上の発掘による出土人骨数はおよそ60体分と推算され、そのうちの40体程度が個体埋葬骨、その他が部分骨や散乱骨などである。これら出土人骨についての近年の記載報告として木村(2002)がある。

上記のうち本館に収蔵されている標本は、1907年の東京帝国大学人類学教室、1923年の上羽貞幸、1924年の東京帝国大学人類学教室、1964年から1967年にかけての加曽利貝塚調査団の発掘によるものである。これらは個体埋葬骨31体と部分骨1体分からなる。今回の再整理作業では発掘時の写真と標本状態を再検討し、その結果、個体同定の一部が木村(2002)の解釈と異なっている。また、遠藤・遠藤(1979)と木村(2002)に収録されていない胎児ないし乳児骨3体を今回新たに加えた。

なお、本貝塚の主な出土人骨が属する時代区分は、北貝塚では中期後葉から後期前葉、南貝塚では後期前葉から晩期とされている(後藤, 1976、1977b)。

加曽利('07)

この標本は1907年に東京帝国大学人類学教室の坪井正五郎・石田収蔵・松村瞭により発見され、小金井良精に託された人骨である(八幡, 1924)。人骨の発掘報告と記載報告はともにないが、小金井(1923)がこの人骨の埋葬について触れている。

現在1標本として本館の標本資料報告No. 3に登録。

保存資料:なし

加曽利('23)

標本付属の札に「某氏発掘B地点Ⅲ-2」と由来が記されている。1923年に上羽貞幸がB地点で人骨を発見したという八幡(1924)の記述から、本標本は上羽の発掘に由来するものと考えられる。この人骨についての発掘報告と記載報告はともにない。

現在2標本として本館の標本資料報告No. 3に登録。

保存資料:なし

加曽利('24)

これらの標本は1924年の3月から4月にかけて、松村瞭・甲野勇・山内清男・八幡一郎・宮坂光次・小金井良精により発掘された人骨である。人骨の記載報告はないが発掘報告として八幡(1924)がある。八幡(1924)によると、1体はB地点(南貝塚北西部)、上羽貞幸による人骨発掘地点の南東10 mから発見された。他の2体はD地点(北貝塚西部)から出土したという。なお、この発掘の際に土器型式の違いが指摘され、後に加曽利B式、加曽利E式として呼称されるに至った(後藤, 1974a)。

現在3標本として本館の標本資料報告No. 3に登録。

保存資料:人類学教室古写真アルバムNo. 82

加曽利北

これらの標本は1965年から1967年にかけて、滝口宏を団長とする加曽利貝塚調査団により北貝塚で発掘された人骨である。人骨の発掘報告として後藤(1977b)が、記載報告として鈴木ほか(1976)がある。この調査では13体の人骨が出土しており(後藤, 1977b)、そのうちの8体分が本館に収蔵されている。発掘調査地区は、1962年に武田宗久が発掘した地点(北貝塚北東部)、そこから約80 m南方で1958年に明治大学考古学研究室が発掘した地点付近(北貝塚南東部、E地点の東側)、「もっとも標高が高く貝層の厚いと思われる」地点(北貝塚西部)の3ヶ所からなる(後藤, 1977a)。

現在8標本として本館の標本資料報告No. 3に登録。

保存資料:発掘写真Ⅰ(1965年12月)

加曽利貝塚発掘記録(1965年12月13日)

加曽利貝塚博物館所蔵の埋葬状況写真(コピー、一部未出版)

加曽利南

これらの標本は1964年から1965年にかけて加曽利貝塚調査団により南貝塚で発掘された人骨である。人骨の発掘報告として後藤(1976)が、記載報告として鈴木ほか(1976)がある。この調査では31体の人骨が出土しており、そのうちの19体が東側堆積部に、8体が西側堆積部に、2体が南西端の独立堆積部に、2体が北東端の開口部に位置していた(後藤, 1976)。本館には、標本資料報告No. 3に登録されている人骨15体分のほか、未登録の胎児ないし乳児骨3体が収蔵されている。未登録標本については新規のUMUT番号を与えず、標本に付属する紙片の情報から各々を後藤(1976)の第15号、第20号、第21号人骨と判定し、「加曽利南15」、「加曽利南20」、「加曽利南21」として記録した。

現在15標本として本館の標本資料報告No. 3に登録。このほか未登録の3標本を追加。

保存資料:加曽利貝塚博物館所蔵の埋葬状況写真(コピー、一部未出版)

草刈場貝塚

所在地:千葉県千葉市若葉区貝塚町

草刈場貝塚は南の荒屋敷貝塚や台門貝塚とともに貝塚町の舌状台地上に位置し、いわゆる貝塚町貝塚群の一部をなす遺跡である(宍倉, 1974、斎木, 2000)。かつてはこれら周辺の遺跡とあわせて千葉貝塚、貝塚町貝塚とも呼ばれていた(酒詰, 1959)。縄文時代中期から晩期に属するとされ、南北200 m、東西180 mに広がる環状ないしは馬蹄形の貝塚である(後藤, 1974b、西山, 1974)。

本貝塚における最初の発掘は、東京帝国大学人類学教室の酒詰仲男・和島誠一・中島寿雄らにより1942(昭和17)年に行なわれている(宍倉, 1974、酒詰, 2001)。この発掘では人骨の収集を目的とする以外にも、「環状貝塚に一直線に試掘壕を入れて、その貝殻の散布も見られない中央の凹みを調査」するという本邦の貝塚調査において初の試みがなされた(酒詰, 2001)。このほか、貝塚の概要は後藤(1974b)がまとめている。

人骨の収集は上記の酒詰らによる1942年の発掘で行なわれた。酒詰の実測図(保存資料)には1号から6号までの人骨が表記されており、さらに甕棺に納められた乳児骨ないしは胎児骨が発見されたという(酒詰, 2001)。

本館に収蔵されている標本は、酒詰らの発掘に由来する個体骨5体分と他の部分骨、および由来の明らかでない個体骨1体分からなる。

草刈場('42)

これらの標本は東京帝国大学人類学教室の酒詰仲男・和島誠一・中島寿雄らにより1942年7月に収集された人骨である。人骨の記載報告はないが発掘報告として酒詰(1951、2001)がある。そのほか、酒詰の実測図(保存資料)、発掘状況写真(人類学教室古写真アルバムNo. 3)が本館に収められている。

発掘状況写真には人骨を撮影したものが若干数含まれており、少なくとも2体分の成人骨が見られる。現存する標本との照合は難しいが、今回の評価ではUMUT131161(第2個体)と131163が撮影されているものと判断した。実測図と写真に見られるピットの配置、掘り込みの状況、人骨の形態特徴や残存部位の情報などから判断して、UMUT131161(第2個体)は発掘時の第6号人骨に、UMUT131163は第5号人骨に相当する可能性が高い。

また、草刈場('42)1(UMUT131159)から草刈場('42)3(UMUT131161)にはそれぞれ「第一号人骨」から「第三号人骨」と記された紙片が付属している。草刈場('42)5(UMUT131163)は第5号人骨に相当すると考えられることから、本館での標本名は発掘時の番号に対応するものと考えられる。ただし、前述のとおり第6号人骨は草刈場('42)3(UMUT131161)の第2個体であると考えられ、草刈場('42)6(UMUT131164)とは対応しない。

現在6標本として本館の標本資料報告No. 3に登録。

保存資料:草刈場貝塚発掘実測図(1942年7月)

人類学教室古写真アルバムNo. 3

草刈場

この標本についての詳細な情報はなく、標本付属の紙片に「学会発掘 草刈場?」と由来が記されているのみである。

現在1標本として本館の標本資料報告No. 3に登録。

保存資料:なし

向ノ台貝塚

所在地:千葉県千葉市中央区都町

向ノ台貝塚は縄文時代早期末葉の時代区分に属し、東京湾東岸地域における最古級の貝塚のひとつとして知られている(青沼・松村, 2000)。周辺地域には千葉市の主要遺跡である加曽利貝塚、矢作貝塚、貝塚町貝塚群などが分布する(文化庁文化財保護部, 1974)。本貝塚は都小学校の敷地内に位置し、校舎の建て替えなどによりほぼ壊滅の状態とされている(青沼・松村, 2000)。貝塚の概要は青沼・松村(2000)がまとめている。

本貝塚における発掘と人骨の収集は、東京大学人類学教室の酒詰仲男らと県立千葉中学校郷土研究会によって1946(昭和21)年から1947(昭和22)年にかけて行なわれた(千葉県立千葉中学校校友会, 1947)。半径約10 mの範囲に点在する3ヶ所の貝層のうち、北側(A地点)と東側(B地点)の計30坪(約100 m^2)ほどが発掘されており、各地点から2体ずつ、計4体の屈葬人骨が得られた(千葉県立千葉中学校校友会, 1947)。これらの人骨は当時の我が国で最古のものとされていたことから(武田, 1953)、大きな注目を集めるに至った(千葉新聞, 1947)。

本館に収蔵されている標本は、上記の発掘に由来する成人の個体骨4体、および由来の明らかでないその他の部分骨からなる。

辺田

本館の標本資料報告No. 3(遠藤・遠藤, 1979)によると、辺田標本は原記録地名欄に「千葉県千葉市辺田」と記されているが、具体的な遺跡名の記述がない。一方で、当時の発掘記録である酒詰仲男日録・調査(調査21)、および発掘時のものと思われる標本の付属紙片には「辺田貝塚」と記されている。酒詰仲男日録・調査(調査21)の発掘内容から判断して、ここでの辺田貝塚とは、当時の「向い台」(酒詰, 1959)、現在の向ノ台貝塚を指す。

UMUT130098から130101の4標本は、東京大学人類学教室の酒詰仲男らと県立千葉中学校郷土研究会によって1946年12月から1947年1月にかけて発掘された人骨である。発掘報告として千葉県立千葉中学校校友会(1947)と武田(1953)が、人骨の記載報告として青沼・松村(2000)がある。ただし、本館においては青沼・松村の調査の後、諏訪元と高橋昌子が土塊中の人骨資料(顎骨片や歯牙など)を新たに加えて個体分けと同定を更新した。本報告書では諏訪・高橋の同定に従って4標本を記録した。これらの標本は、四肢骨が比較的残存しており、また発掘時のものと思われる付属紙片に各発掘時番号が記されていることから、当時の屈葬人骨4体に相当すると考えられる。ただし、各標本と発掘時番号を対応付ける情報は酒詰仲男日録・調査(調査21)や発掘報告に記されていない。

UMUT130102(下顎骨)は、発掘時のものと思われる付属紙片に「三号人骨? 四号(校舎〇)」と記されており、またUMUT130098から130101の4標本と保存状態が類似することから、人類学教室などの発掘による屈葬人骨4体のうちの3号、4号人骨に由来する可能性が高い。

UMUT130103は少なくとも8体分の上腕骨からなる。UMUT130098から130102の5標本とは保存状態が異なっており、発掘者、発掘年、発掘地点は明らかでない。

現在6標本として本館の標本資料報告No. 3に登録。

保存資料:なし

矢作貝塚

所在地:千葉県千葉市中央区矢作町

矢作貝塚は縄文時代後期に属する馬蹄形貝塚として報告されている(後藤, 1974b、千葉市, 1976)。加曽利貝塚の南西約3 kmに位置し、周辺地域には向ノ台貝塚、亥鼻貝塚などが分布する(文化庁文化財保護部, 1974)。古墳時代後期における大規模集落の形成に加えて、水道関連施設や住宅地の建設により、現在では大半の旧状が失われたと考えられている(清藤, 2000)。

本貝塚は1887(明治20)年に上田英吉によってその存在が報告されており(「下総国千葉郡貝墟記」、上田, 1887)、比較的早くから遺物の収集が行なわれてきた(東京帝国大学, 1897、千葉県, 1919)。本貝塚の研究史は清藤(2000)がまとめている。

人骨の収集に関して、千葉県君津郡教育会(1927)や中谷(1929)は人骨が出土した旨を記しているが、これらの文献には発掘者、発掘年、個体数などの情報がない。その後、1937(昭和12)年の武田宗久、1944(昭和19)年の鈴木尚・酒詰仲男ら東京帝国大学人類学教室、1980(昭和55)年の千葉県文化財センターによって人骨の収集が行なわれた(武田, 1938、人類学雑誌の雑報, 1944、千葉県水道局, 1981、酒詰, 2001)。そのほか、武田による1937年の発掘に先立ち、甕棺葬の小児骨を含む計4体の人骨が人夫によって発掘されたという(武田, 1938)。以上の発掘による出土人骨数は60体程度と推算され、そのうちのおよそ35体が個体埋葬骨、その他が部分骨や散乱人骨と考えられる。なお、千葉県文化財センターの発掘人骨(個体骨5体と断片骨16点)については平本(1981)の記載報告がある。

上記のうち本館に収蔵されている標本は東京帝国大学人類学教室の発掘によるものであり、これらは個体骨7体分とその他の部分・断片骨からなる。

矢作

これらの標本は、東京帝国大学人類学教室の鈴木尚・酒詰仲男らによって1944年4月から5月にかけて発掘された人骨である。人骨の記載報告はないが発掘報告として人類学雑誌の雑報(1944)と酒詰(2001)がある。そのほか、人類学教室酒詰仲男調査報告(日録2)と発掘状況写真(人類学教室古写真アルバムNo. 19)が本館に収められている。

武田宗久は1937年に7体の個体埋葬骨(1号から7号)を発掘したが、1号人骨以外は元位置のまま埋め戻された(武田, 1938)。また当時、地元の人が畑の耕作中に「十五体程三尺位おきに、北まくらに寝ている」人骨を発見したが、これらは箱に一括して埋め戻された(酒詰仲男日録・調査〔調査18/1〕)。人類学教室による1944年の調査ではこれらの人骨が再発掘されており、さらに周辺地域において8号から12号の個体骨、甕棺葬の新生児骨、多数の散乱人骨が新たに発掘された(酒詰仲男日録・調査〔調査18/1〕、人類学教室酒詰仲男調査報告〔日録2〕)。

本館の発掘状況写真には人骨を撮影したものが若干数含まれている。現存する標本との照合により、今回の評価ではUMUT131792、131794、131795、131796、131797、131825が撮影されているものと判断した。写真に見られる人骨の形態特徴や位置関係などの情報、武田(1938)の人骨出土図・図版、酒詰仲男日録・調査(調査18/1)から判断して、上記の各標本は発掘時の2号、4号、5号、6号、7号、8号人骨に相当する。また8号以外の発掘時番号は、本館の標本資料報告No. 3(遠藤・遠藤, 1979)の標本名と一致することから、UMUT131793(矢作3)は発掘時の3号人骨に相当すると考えられる。さらに、現存する標本の形態特徴や付属紙片の情報、酒詰仲男日録・調査(調査18/1、18/2)から判断して、UMUT131824は発掘時の10号小児人骨、UMUT131825(第2個体)は甕棺葬の新生児骨である可能性が高い。一方で、箱に一括して埋め戻された人骨は、人類学教室の再発掘時には「マウンドの人骨」と呼ばれており、大腿骨から12、13体分と見積もられていた(酒詰仲男日録・調査〔調査18/1〕)。本館の標本資料報告No. 3(遠藤・遠藤, 1979)の備考欄に「マウンド人骨」と記された矢作標本は全部で19標本あり(主として大腿骨、もしくは頭蓋骨片)、これらの標本が上記の人骨に由来すると考えられる。ただし、例外としてUMUT131813の頭骨標本は、発掘時のものと思われる付属紙片に「第Ⅰ区人骨 七体中 第2号」と記されていること、下顎骨に「矢作2」と記されていること、歯牙萌出状況より若年と考えられることから、UMUT131792

(矢作2)の頭部に当たると考えられる。

本館には、標本資料報告No. 3(遠藤・遠藤, 1979)に登録されている36標本のほか、少なくとも10体分が混在する未登録の人骨が収蔵されている。発掘時のものと思われる付属紙片に「マウンド人骨 矢作貝塚」と記されていることから、本人骨は人類学教室による1944年の発掘に由来する可能性がある。本人骨については新規のUMUT番号を与えず、付属紙片の情報から「矢作マウンド人骨」と一括してここに記録した。

現在36標本として本館の標本資料報告No. 3に登録。このほか未登録の1標本を追加。

保存資料:人類学教室酒詰仲男調査報告(日録2)

人類学教室古写真アルバムNo. 19

蕨立貝塚

所在地:千葉県千葉市若葉区千城台西

蕨立貝塚は、直径約100 mの範囲で環状に点在する8ヶ所の大規模な貝ブロックからなり(千葉市, 1976)、縄文時代中期に属する遺跡とされている(武田, 1953、後藤, 1974a、古内, 2000b)。加曽利貝塚の南東約1.8 kmに位置し、周辺地域には同時代のさら坊貝塚、坂月台貝塚、味噌草野遺跡が分布している。特にさら坊貝塚は同一台地上に立地し、本貝塚と同一の遺跡である可能性が指摘されてきたが(岡崎・石井, 1982)、現在では宅地造成のために両貝塚とも大半の旧状が失われている(後藤, 1974a、岡崎・石井, 1982)。本貝塚の研究史は古内(2000b)がまとめている。

人骨の収集は1951(昭和26)年と1965(昭和40)年の2度の発掘調査により行なわれた。まず1951年には、「千葉市誌」(千葉市誌編纂委員会, 1953)編纂の一環としての調査で、武田宗久と千葉市誌編纂委員会等のグループにより個体埋葬骨2体と散乱人骨1体分が発掘された(武田, 1953、1955)。1965年には、宅地造成工事に先立ち同じく武田を中心とした調査が行なわれ、個体埋葬骨6体と甕棺葬の幼児断片骨のほか、No. 9住居址内から人骨が発掘された(千葉市, 1976)。以上の発掘による出土人骨数は少なくとも11体分と推算される。これらの人骨は全て貝ブロックの環状構造の西側半分から出土している(千葉市, 1976)。

本館には2標本が収蔵されていたが、現在のところ所在が不明である。

なお、本貝塚の出土人骨は、土器編年により縄文時代中期後葉(加曽利E1期)に属する住居址や大型ピット等の遺構から出土したとされている(千葉市, 1976)。

蕨立

本館の標本資料報告No. 3(遠藤・遠藤, 1979)の年月日欄に「1951」と記されている点から、武田宗久と千葉市誌編纂委員会等のグループによる1951年の発掘に由来すると考えられる。人骨の記載報告はないが、発掘報告として武田(1953、1955)がある。登録されている2標本の所在は現在のところ不明であり、各標本が個体埋葬骨2体と散乱人骨1体分のいずれに相当するのかは明らかでない。

現在2標本として本館の標本資料報告No. 3に登録。

保存資料:なし

引用文献

青沼道文

2000 加曽利貝塚. 千葉県史料研究財団編「千葉県の歴史」資料編 考古1(旧石器・縄文時代) 県史シリーズ 9, pp:566-573. 千葉県.

青沼道文・松村博文

2000 向ノ台貝塚. 千葉県史料研究財団編「千葉県の歴史」資料編 考古1(旧石器・縄文時代) 県史シリーズ 9, pp:296-297. 千葉県.

伊藤和夫

1959a 千葉県石器時代遺跡地名表. 平野元三郎・伊藤和夫・金子浩昌編「千葉県石器時代遺跡地名表 県下の石器時代遺跡の分布とその文化」pp:1-36. 千葉県教育委員会.

1959b 千葉県の石器時代文化. 平野元三郎・伊藤和夫・金子浩正編「千葉県石器時代遺跡地名表 県下の石器時代遺跡の分布とその文化」pp:37-72. 千葉県教育委員会.

上田英吉

1887 下総国千葉郡貝墟記. 東京人類学会雑誌 2:308-315.

遠藤美子・遠藤萬里

1979 「東京大学総合研究資料館収蔵日本縄文時代人骨型録」東京大学総合研究資料館標本資料報告第三号.

大山史前学研究所

1937 千葉県千葉郡都村加曽利貝塚調査報告. 史前学雑誌 9:1-68.

岡崎文喜・石井 穂

1982 「遺跡研究論集Ⅱ 蕨立遺跡を中心とした縄文時代中期初頭集落址の研究」遺跡研究会.

加部巌夫

1881 古器物見聞の記. 好古雑誌 4(16):4-16.

木村 賛

2002 「加曽利貝塚人骨の総合調査」貝塚博物館研究資料第6集. 千葉市立加曽利貝塚博物館.

清藤一順

2000 矢作貝塚. 千葉県史料研究財団編「千葉県の歴史」資料編 考古1(旧石器・縄文時代) 県史シリーズ 9, pp:762-765. 千葉県.

小金井良精

1923 日本石器時代人の埋葬状態. 人類学雑誌 38:25-47.

後藤和民

1974a 縄文中期の遺跡. 千葉市史編纂委員会編「千葉市史」第一巻 原始古代中世編, pp:92-111. 千葉市.

1974b 縄文後期の遺跡. 千葉市史編纂委員会編「千葉市史」第一巻 原始古代中世編, pp:111-128. 千葉市.

1974c 縄文晩期の遺跡. 千葉市史編纂委員会編「千葉市史」第一巻 原始古代中世編, pp:128-131. 千葉市.

1976 加曽利南貝塚人の埋葬. 杉原荘介編「加曽利南貝塚」pp:192-205. 中央公論美術出版.

1977a 加曽利北貝塚の調査経過. 杉原荘介編「加曽利北貝塚」pp:14-19. 中央公論美術出版.

1977b 加曽利北貝塚人骨の埋葬. 杉原荘介編「加曽利北貝塚」pp:204-213. 中央公論美術出版.

1977c 埋葬の状態. 滝口宏編「加曽利貝塚Ⅳ」pp:68-74. 中央公論美術出版.

後藤和民・庄司克

1981 昭和47年度加曽利南貝塚南側平坦部第4次遺跡限界確認調査概報. 貝塚博物館紀要 7:1-20. 加曽利貝塚博物館.

斎木 勝

2000 荒屋敷貝塚. 千葉県史料研究財団編「千葉県の歴史」資料編 考古1(旧石器・縄文時代) 県史シリーズ 9, pp:554-557. 千葉県.

酒詰仲男

1951 地形上より見たる貝塚－殊に関東地方の貝塚について－. 考古学雑誌 37:1-14.

1959 「日本貝塚地名表」土曜会.

2001 「貝塚に学ぶ」学生社.

雑報
1944　仮指定千葉市矢作貝塚の発掘. 人類学雑誌 59:197.
宍倉昭一郎
1974　縄文時代の遺跡の分布. 千葉市史編纂委員会編「千葉市史」第一巻 原始古代中世編, pp:64-81. 千葉市.
1975　人骨の出土状態. 武田宗久編「加曽利貝塚Ⅰ 昭和37年度加曽利北貝塚調査報告書」貝塚博物館調査資料第一集, pp:45-48. 加曽利貝塚博物館.
1976　貝塚町貝塚群の現状とその歴史的意義.「貝塚町貝塚群と原始集落」シンポジウム資料.
鈴木尚・木村賛・馬場悠男
1976　加曽利貝塚発掘の人骨. 杉原荘介編「加曽利南貝塚」pp:206-225. 中央公論美術出版.
芹澤長介
1962　千葉県千葉市加曽利貝塚. 日本考古学年報 11:73.
武田宗久
1938　下総国矢作貝塚発掘報告. 考古学 9:371-395.
1953　原始社会. 千葉市誌編纂委員会編「千葉市誌」pp:14-86. 千葉市.
1955　千葉県千葉市蕨立貝塚. 日本考古学年報 4:75-76.
種田斉吾・斎木 勝
1978　C地点の調査.「千葉市荒屋敷貝塚－貝塚中央部発掘調査報告－」pp:13-57. 千葉県文化財センター.
千葉県
1919　「千葉県誌」. 多田屋書店.
千葉県君津郡教育会
1927　「千葉県君津郡誌」上編.
千葉県教育委員会
1969　「千葉県文化財総覧」.
千葉県水道局
1981　千葉県文化財センター編「千葉県千葉市矢作貝塚」.
千葉県立千葉中学校校友会
1947　郷土研究.「かつらぎ」昭和22年3月復刊号, pp:25-32.
千葉市
1976　千葉市史編纂委員会編「千葉市史」史料編1 原始古代中世.
千葉市誌編纂委員会
1953　「千葉市誌」千葉市.
千葉新聞
1947　向の台貝塚の発掘.「千葉新聞」2月1日付記事.
東京帝国大学
1897　「日本石器時代人民遺物発見地名表」.
中谷治宇二郎
1929　「日本石器時代提要」岡書院.
西山太郎
1974　「千葉市荒屋敷貝塚－遺構確認調査報告書－」千葉県都市公社.
平本嘉助
1981　自然科学的分析. 千葉県文化財センター編「千葉県千葉市矢作貝塚」pp:141-147. 千葉県水道局.
古内 茂
2000a　長谷部貝塚. 千葉県史料研究財団編「千葉県の歴史」資料編 考古1(旧石器・縄文時代) 県史シリーズ 9, pp:584-585. 千葉県.
2000b　蕨立貝塚. 千葉県史料研究財団編「千葉県の歴史」資料編 考古1(旧石器・縄文時代) 県史シリーズ 9, pp:590-591. 千葉県.
2000c　台門貝塚. 千葉県史料研究財団編「千葉県の歴史」資料編 考古1(旧石器・縄文時代) 県史シリーズ 9, pp:750-751.

千葉県.

文化庁文化財保護部

1974 「全国遺跡地図－千葉県－」国土地理協会.

堀越正行

1992a 研究のあゆみ. 市立市川考古博物館編「堀之内貝塚資料図譜」市立市川考古博物館研究調査報告第5冊, pp:11-24. 市立市川考古博物館.

1992b 堀之内貝塚の性格. 市立市川考古博物館編「堀之内貝塚資料図譜」市立市川考古博物館研究調査報告第5冊, pp:25-41. 市立市川考古博物館.

松浦秀治

1976 荒屋敷貝塚出土獣骨中のウランについて.「千葉市荒屋敷貝塚－貝塚外縁部遺構確認調査報告－」pp:70-75. 千葉県文化財センター.

森本岩太郎

1978 荒屋敷貝塚出土人骨所見.「千葉市荒屋敷貝塚－貝塚中央部発掘調査報告－」pp:145-146. 千葉県文化財センター.

山崎直方

1893 下総曽谷、千葉の二貝塚に就て. 東京人類学会雑誌 8:219-224.

山内清男

1939-1941 「日本先史土器図譜」先史考古学会.

八幡一郎

1924 千葉県加曽利貝塚の発掘. 人類学雑誌 39:209-212.

標本別データシート

以下は、東京大学総合研究博物館標本資料報告第61号と第69号(水嶋 他, 2006、水嶋・久保, 2007)のうち、千葉市出土の個体骨標本のデータシートを転載したものである。ただし、加曽利貝塚出土標本については、同様の情報を木村(2002)において報告済みであるため、それを補完するデータシートだけを掲載する。

データシートの各項目は以下の定義のもとに記載されている。

UMUT

本館の標本資料報告No. 3における登録番号を表わす。本整理作業はこの登録番号に基づいて行なわれ、新規の登録番号は設けなかった。ただし、まとまりのある別個体が同一登録番号の標本中に存在する場合は、131061(第2個体)のようにカッコ内に第〜個体と付記し、新たなデータシートを作成した。

遺跡名称

標本が属する遺跡名称。ここではふたつの名称を併記した。ひとつめには、標本資料報告No. 3の採集地欄にある遺跡名(ない場合は標本名の名称部)を記した。ただし今回新たに記録した加曽利貝塚の3標本は「未登録」とした。ふたつめには、実際に標本が由来すると考えられる遺跡名(現在使用されている遺跡名、もしくは最も妥当と思われる名称)を示した。

時代

標本が属する時代。早期・前期・中期・後期・晩期とする時代区分のうち、各遺跡の主な出土人骨が属するとされている時代を記した。ただし標本によっては、土器編年を用いた縄文時代内の時代区分が出版文献中に明記されている場合がある。これについては年代情報の項目に記した。

標本名

標本資料報告No. 3中の標本名を表わす。ただし今回、加曽利貝塚において3標本を追加しており、これについては付属紙片の記述を基に標本名を設定した。

小金井(KG)・長谷部(HS)・鈴木(SZ)・埴原(HN)・馬場(BB)番号

これらは標本資料報告No. 3の作成以前に使用されていた番号であり、それぞれ小金井良精、長谷部言人、鈴木尚、埴原和郎、馬場悠男による。標本資料報告No. 3中の備考欄に記されている番号を表わす。

カタログ備考

標本資料報告No. 3中の備考欄を原文のまま表わす。

出土報告文献

標本の出自を明確にする出版文献が存在する場合、その著者名(もしくは文献名)および出版年を記す。また調査、発掘、出土状況等に関する文書保存資料が本館に所蔵されている場合は「保存資料」と記す。

出土報告番号

上記報告内でこの標本に付けられている番号、特に発掘時の番号を表わす。

発掘調査者

発掘の代表者もしくは調査者・団の名称を表わす。

発掘調査地区

出版文献中に、この標本が出土した地区・地点の情報が明記されている場合は、その地区・地点名とともに、その著者名(もしくは文献名)および出版年を記す。本館所蔵の保存資料中に見られる場合は「保存資料」と記す。

実測図

出版文献中に、この標本の実測図が存在する場合は、その著者名(もしくは文献名)および出版年を記す。本館所蔵の保存資料中に見られる場合は「保存資料」と記す。

写真

出版文献中に、この標本の出土状況の写真が存在する場合は、その著者名(もしくは文献名)および出版年を記す。本館所蔵の保存資料中に見られる場合は「保存資料」と記す。

年代情報

出版文献中に、この標本に関して、土器編年を用いた縄文時代内の時代区分が明記されている場合は、その時代区分とともに、著者名(もしくは文献名)および出版年を記す。本館所蔵の保存資料中に見られる場合は「保存資料」と記す。

人骨記載報告

出版文献中に、この標本の形態や計測値が記載されている場合は、その著者名(もしくは文献名)および出版年を記す。

頭骨

頭骨の保管所在を表わす。破片がひとつでもあれば「頭骨ケース」「平箱」のいずれかを記し、ない場合は「なし」とする。

歯の有無

歯の有無を表わし「あり」「なし」のいずれかで記す。保存の良好な歯根だけの場合も「あり」とする。

性別

寛骨の形態から判断できる場合のみ「男性」「女性」のいずれかで記す。寛骨が複数重複している場合は性別とともに個体数を併記する。

歯牙萌出状況

Ubelaker(1989)page 64のFigure 71を用いて、歯の形成・萌出状況による年齢推定を行なう。ただし、年齢推定が図の中間になる場

合は繰り上げて記し、6歳以上は「6+」とする(成人も含む)。また歯がない場合であっても、顎骨の歯槽が保存されていればそれに基づいて記す。重複する顎骨の場合は、たとえば「重複(6+, 5, 1)」のように各年齢を記す。混入した顎骨の場合は年齢推定の対象としない。遊離歯については、主要個体骨群に属する場合は年齢推定の参考に加えるが、そのように想定できない場合は年齢推定に用いない。

骨端癒合状況

Krogman(1962)page 33のTable 5をもとにして、骨端の癒合状況による年齢推定を行なう。対象とする骨端とその癒合年齢としては以下のものを用いる。

clavicle sternal end	25-28
prox humerus	19-20
dist radius	18-19
dist ulna	18-19
prox femur	17-18
dist femur	17-18
prox tibia	17-18
prox fibula	17-18
dist tibia	15-16
dist fibula	15-16
humerus med epicondyle	15-16
metacarpal	15-16
metatarsal	15-16
hand phalanges	15-16
dist humerus	14-15
prox radius	14-15
prox ulna	14-15
calcaneus	14-15
foot phalanges	14-15
pelvis primary elements	13-15

保存されている部位全てが癒合している場合はその中で年齢の最も高いものを、全て癒合していない場合はその中で年齢の最も低いものを用い、たとえば「prox humerus 20+」や「dist tibia 15-」のように根拠を挙げる。癒合と未癒合の部位が混在する標本ではその中間値を記し(0.5は繰り上げ)、たとえば「19(prox humerus, prox tibia)」のように根拠となった部位を年齢とともに併記する。複数の年齢群から構成される重複の場合は、たとえば「prox humerus 20+, calcaneus 14-」のように必要に応じて最大値と最小値を記す。

特記事項

標本に関する特記事項。学史的な意義、文献中で指摘された病変や損傷など。文献から引用する場合は著者名(もしくは文献名)および出版年を記す。本館所蔵の保存資料から引用する場合は「保存資料」と記す。

整理備考

標本の混入や部位の重複などに関する参考情報、判断根拠を記す。特に「混入」「重複」は以下のように定義し、記載する。「混入」とは、主要個体骨群が特定できる場合、明らかにそれとはサイズや形態などが異なる別個体の遊離骨を指す。この場合、整理備考に主要混入骨を3個程度まで記し、保存状況図には記入しない。「重複」とは、複数個体が含まれるが各個体骨群に十分な信頼度で分別できない状態を指す。この場合、整理備考に最大重複個体数およびその判断根拠となった部位を記し、保存状況図は集合体として記入する。複数個体分からなる「重複」では成人と若年の混合もありうる。

また歯種別の数を記す。個体標本の場合はdi, dc, dm, I, C, P, Mの数を各々記す。このとき上下顎の区別、歯種の詳細は示さない。

混入や重複する歯がある場合は、混入・重複込みの総数を個体標本の場合と同様に記すが、カッコ内に重複・混入の状況を併記する。

保存状況図

標本の保存状況図は以下の基準により記載した。頭蓋骨の破片のうち、5 cmから10 cm程度残っている同定可能な骨を記入。椎体と椎弓からなる椎骨片を±1程度の位置同定で記入。肋骨は記入しない。関節部が大部分残っている長管骨(中手骨・中足骨を含む)を記入。骨幹が半分程度残っている主要四肢長管骨を記入(鎖骨を含むが中手骨・中足骨は含まない)。左右が同定できる手根骨、足根骨を記入。指骨は記入しない。座骨、恥骨、腸骨、仙骨、肩甲骨の破片のうち5 cmから10 cm程度の大きさとして残っているものを記入。

引用文献

Krogman, W. M.
1962 The Human Skeleton in Forensic Medicine. Springfield, Charles C. Thomas.
Ubelaker, D. H.
1989 Human Skeletal Remains: Excavation, Analysis, Interpretation. Washington D.C., Taraxacum.

UMUT	130003	小金井(KG)番号	
遺跡名称	荒屋敷貝塚、荒屋敷貝塚	長谷部(HS)番号	
時代		鈴木(SZ)番号	
標本名	荒屋敷	埴原(HN)番号	1321・155
		馬場(BB)番号	

カタログ備考　fragments. 1321・155 (HN). together with potsherds (Kasori E-type) and animal bones.

出土報告文献

出土報告番号

発掘調査者

発掘調査地区

実測図

写真

年代情報

人骨記載報告

頭骨　平箱　　歯の有無　あり

性別

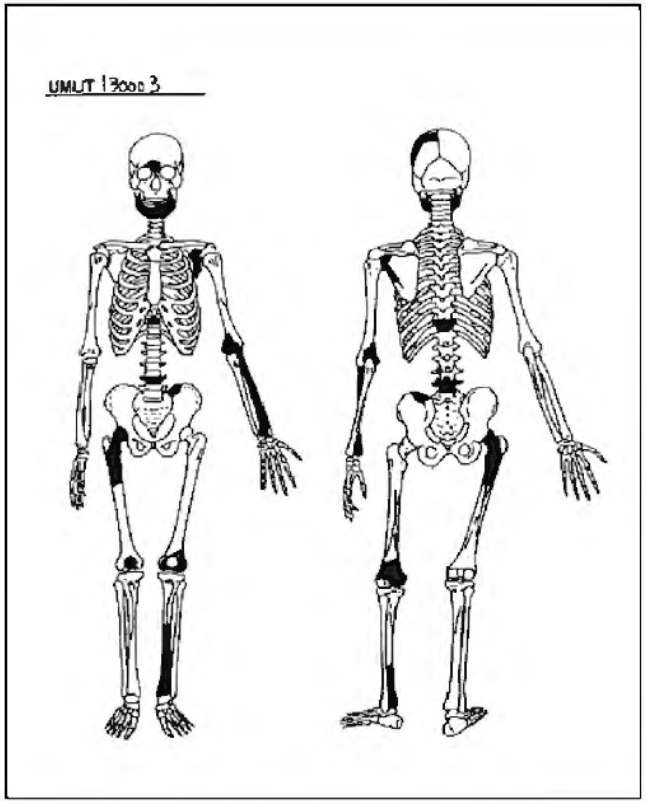
歯牙萌出状況　6+

骨端癒合状況　dist radius 19+

特記事項

整理日　2002.9.6/2004.9.22　　整理者　佐宗/水嶋

整理備考　歯:C×1、M×1
・付属紙片に「荒屋敷（中期加曽利E）昭和二十一年十月」と記されている。
・「1321-155」と記された紙片とともに左肩甲骨片を他所で特定した。埴原番号との一致から左肩甲骨片が本標本に属すると判断してここに収めた。



頭骨ケース

頭骨ケースなし

平箱

UMUT	130093	小金井(KG)番号	
遺跡名称	長谷部貝塚、長谷部貝塚	長谷部(HS)番号	
時代		鈴木(SZ)番号	
標本名	長谷部貝塚1	埴原(HN)番号	
		馬場(BB)番号	

カタログ備考　原番号なし postcranial bones, damaged. ♂estm. age: 30–34y? (KB).

出土報告文献　保存資料

出土報告番号

発掘調査者　酒詰仲男 or 東京大学人類学教室(鈴木尚、渡辺直経、酒詰仲男ほか)

発掘調査地区

実測図

写真

年代情報

人骨記載報告

頭骨　なし　　歯の有無　あり

性別

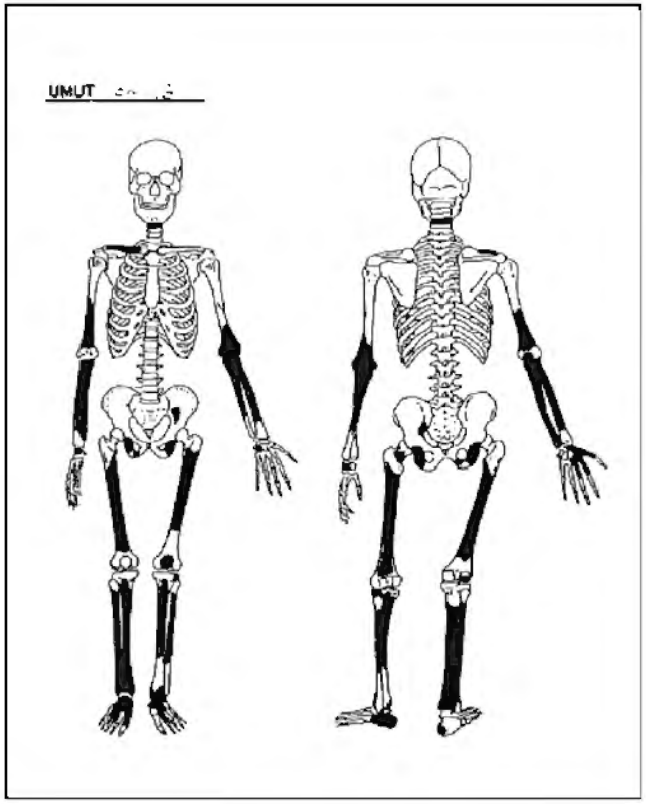
歯牙萌出状況

骨端癒合状況　dist ulna 19+

特記事項

整理日　2003.6.19/2004.9.22　　整理者　斎藤/水嶋

整理備考　歯:I×3
・岩櫃山エジ穴、岩櫃山幕岩、岩櫃山?、松林貝塚、彦崎標本が収められた平箱から「長谷部」と記された右第1中足骨を特定した。この中足骨は本標本の右内側楔状骨と矛盾なく関節し、保存状態が互いに類似することから、本標本に属するものと判断してここに収めた。
・本標本の右寛骨片は130094の右寛骨片と接合する。また本標本の左第1趾基節骨と右鎖骨は、130094の右第1趾基節骨および左鎖骨と形態的に矛盾しない。以上から本標本と130094は同一個体に属すると考えられる。



頭骨ケース

頭骨ケースなし

平箱

UMUT	130094	小金井(KG)番号	
遺跡名称	長谷部貝塚、長谷部貝塚	長谷部(HS)番号	
時代		鈴木(SZ)番号	
標本名	長谷部貝塚2	埴原(HN)番号	
		馬場(BB)番号	

カタログ備考　原番号なし postcranial bones, fragments.

出土報告文献　保存資料

出土報告番号

発掘調査者　酒詰仲男 or 東京大学人類学教室(鈴木尚、渡辺直経、酒詰仲男ほか)

発掘調査地区

実測図

写真

年代情報

人骨記載報告

頭骨　なし　　歯の有無　なし

性別　男性

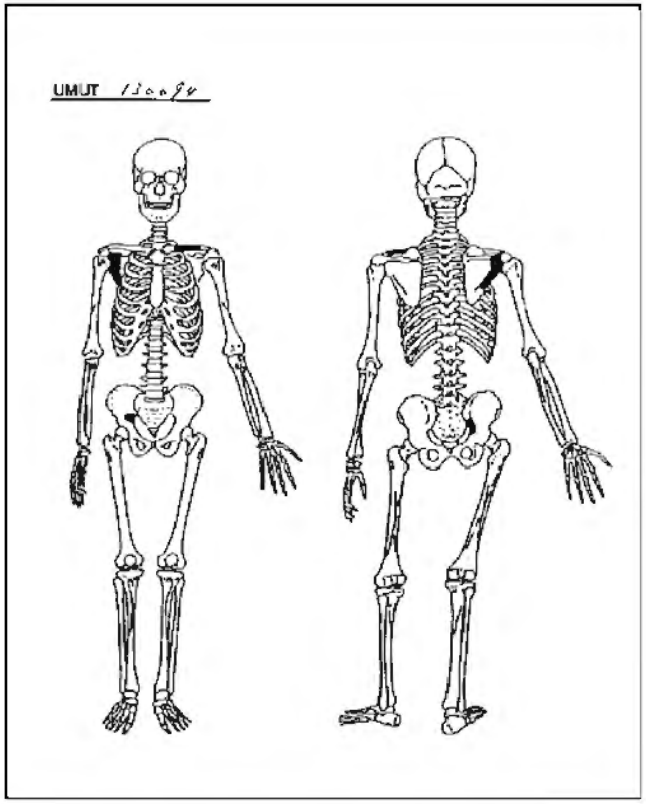
歯牙萌出状況

骨端癒合状況　foot phalanges 15+

特記事項

整理日　2003.6.19/2004.9.22　　整理者　斎藤/水嶋

整理備考　・本標本の右寛骨片は130093の右寛骨片と接合する。また本標本の右第1趾基節骨と左鎖骨は、130093の左第1趾基節骨および右鎖骨と形態的に矛盾しない。以上から本標本と130093は同一個体に属すると考えられる。



頭骨ケース

頭骨ケースなし

平箱

UMUT	130095	小金井(KG)番号	
遺跡名称	長谷部貝塚、長谷部貝塚	長谷部(HS)番号	
時代		鈴木(SZ)番号	
標本名	長谷部貝塚3	埴原(HN)番号	
		馬場(BB)番号	

カタログ備考　原番号なし individual, damaged. femur (infans) mixed. ♀estm. age: 50y? (KB).

出土報告文献　保存資料

出土報告番号

発掘調査者　酒詰仲男 or 東京大学人類学教室(鈴木尚、渡辺直経、酒詰仲男ほか)

発掘調査地区

実測図

写真

年代情報

人骨記載報告

頭骨　平箱　　歯の有無　あり

性別

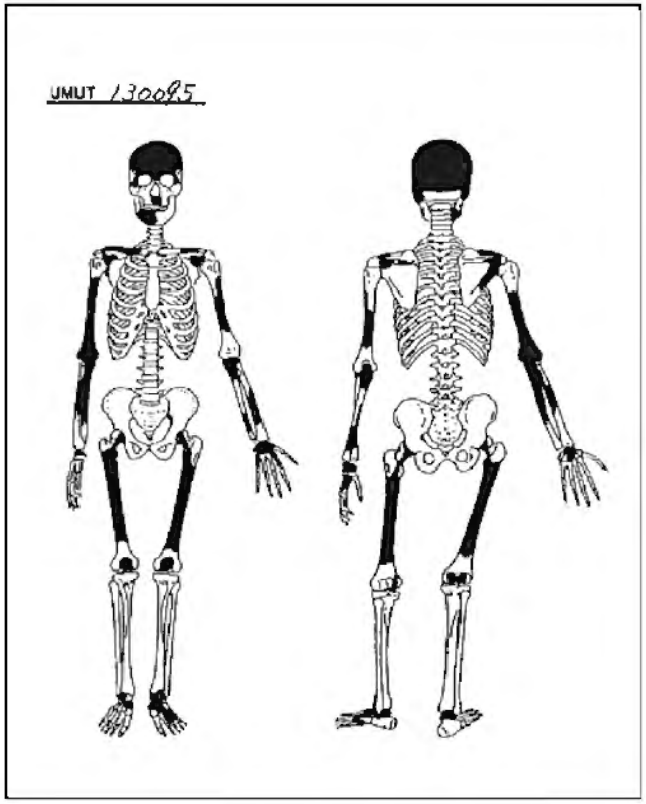
歯牙萌出状況　6+

骨端癒合状況　prox femur 18+

特記事項

整理日　2003.6.26/2004.9.22　　整理者　斎藤/水嶋

整理備考　歯:C×1、P×2、M×3
・幼児の右大腿骨が混入。
・「長谷部3?」と記された標本カードとともに前頭骨、側頭骨、下顎骨、歯牙片等が小箱に収められている。前頭骨と側頭骨は130095の頭骨と接合するため、「長谷部3?」とされる小箱内の標本全てが本標本に属すると判断してここに組み込んだ。

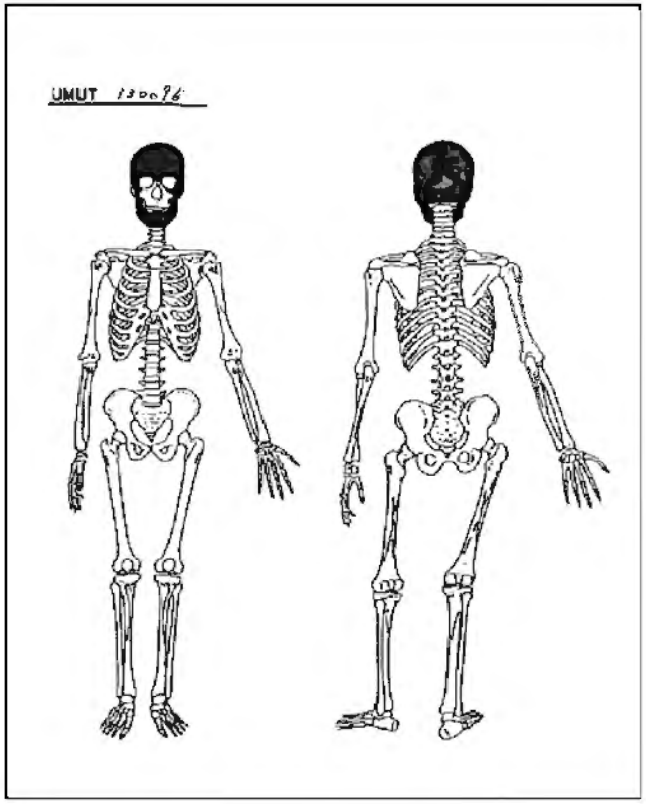


頭骨ケース

頭骨ケースなし

平箱

UMUT	130096	小金井(KG)番号	
遺跡名称	長谷部貝塚、長谷部貝塚	長谷部(HS)番号	
時代		鈴木(SZ)番号	
標本名	長谷部貝塚4	埴原(HN)番号	1321・140
		馬場(BB)番号	
カタログ備考	原番号なし skull, damaged. 1321・140 (HN)?		
出土報告文献	保存資料		
出土報告番号			
発掘調査者	酒詰仲男 or 東京大学人類学教室(鈴木尚、渡辺直経、酒詰仲男ほか)		
発掘調査地区			
実測図			
写真			
年代情報			
人骨記載報告			
頭骨	頭骨ケース	歯の有無	あり
性別			
歯牙萌出状況	6+		
骨端癒合状況			
特記事項			
整理日	2003.6.19/2004.9.22	整理者	斎藤/水嶋
整理備考	歯:I×3、C×2、P×3、M×6		



頭骨ケース

平箱

平箱なし

UMUT	130098	小金井(KG)番号	
遺跡名称	辺田、向ノ台貝塚	長谷部(HS)番号	
時代		鈴木(SZ)番号	
標本名	辺田1	埴原(HN)番号	1321・126
		馬場(BB)番号	

カタログ備考　individual, fragments. 1321・126(HN). together with potsherds (Kayama-type).

出土報告文献　千葉県立千葉中学校校友会(1947)、武田(1953)

出土報告番号

発掘調査者　東京大学人類学教室(酒詰仲男ら)、県立千葉中学校郷土研究会

発掘調査地区

実測図

写真

年代情報

人骨記載報告　青沼・松村(2000)、本報告書

頭骨　平箱　　歯の有無　あり

性別

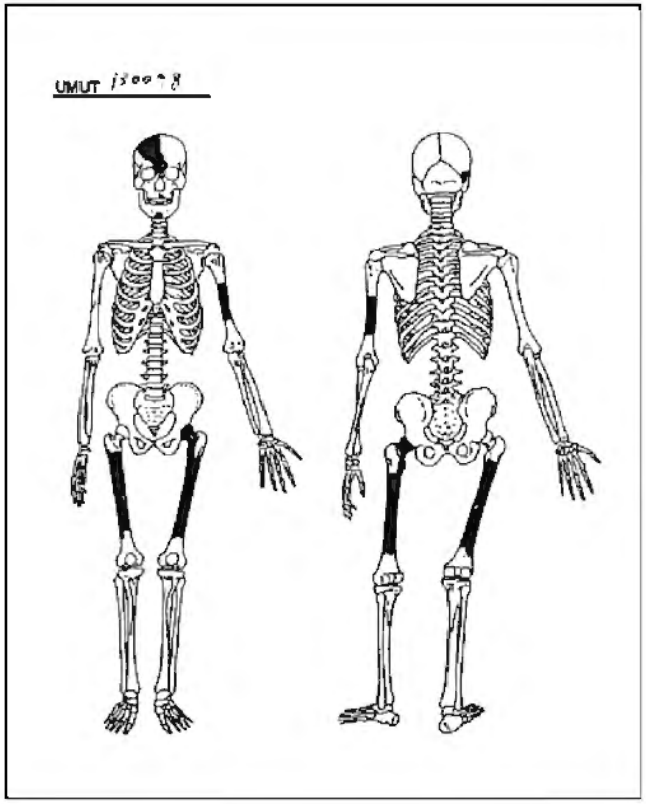
歯牙萌出状況　6+

骨端癒合状況　prox femur 18+

特記事項

整理日　2006.6.6/2006.9.12　　整理者　水嶋/水嶋

整理備考　歯:I×7、C×5、P×8、M×12(C×1が混入)
・発掘時のものと思われる付属紙片に「千葉市辺田貝塚 第1号人骨」、埴原カード1321・126に「貝層の盡きた所より出土」と記されている。
・平箱内の土塊に含まれていた人骨資料のうち、一部の歯牙と顎骨片はUMUT130099と部位が重複したことからUMUT130098に、その他の歯牙と頭骨片はUMUT130098と部位が重複したことからUMUT130099に属すると判断された。平箱内の左上腕骨はUMUT130099と部位が重複したことからUMUT130098に属すると判断された(以上は諏訪・高橋の個体分け、同定による)。



頭骨ケース

頭骨ケースなし

平箱

UMUT	130099	小金井(KG)番号	
遺跡名称	辺田、向ノ台貝塚	長谷部(HS)番号	
時代		鈴木(SZ)番号	
標本名	辺田2	埴原(HN)番号	1321・127
		馬場(BB)番号	

カタログ備考　individual, fragments. 1321・127(HN). together with potsherds (Kayama-type).

出土報告文献　千葉県立千葉中学校校友会(1947)、武田(1953)

出土報告番号

発掘調査者　東京大学人類学教室(酒詰仲男ら)、県立千葉中学校郷土研究会

発掘調査地区

実測図

写真

年代情報

人骨記載報告　青沼・松村(2000)、本報告書

頭骨　平箱　　歯の有無　あり

性別

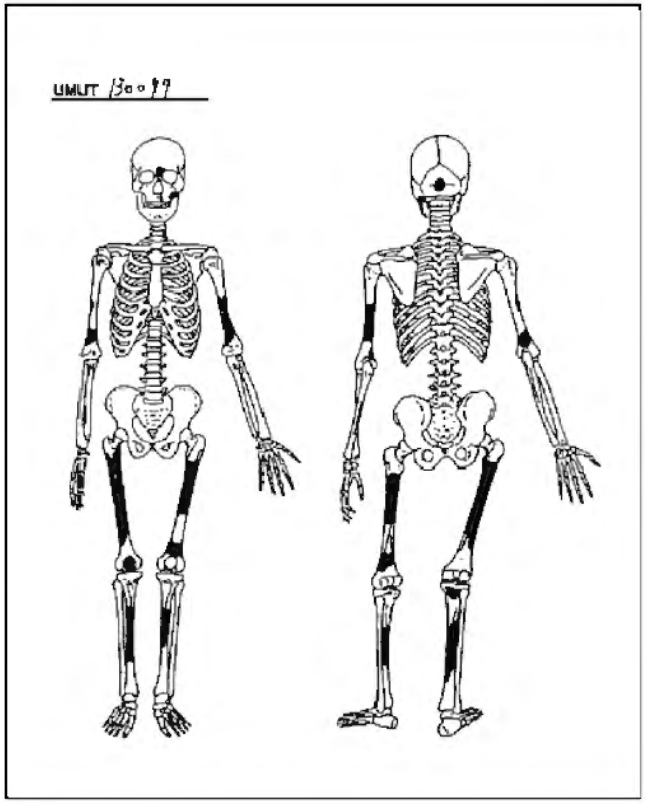
歯牙萌出状況　6+

骨端癒合状況　metatarsal 16+

特記事項

整理日　2006.6.6/2006.9.12　　整理者　水嶋/水嶋

整理備考　歯:I×1、C×2、P×4、M×11
・発掘時のものと思われる付属紙片に「千葉市辺田貝塚 第2号人骨」、埴原カード1321・127に「貝層の盡きた所より出土」と記されている。
・平箱内の土塊に含まれていた人骨資料のうち、一部の歯牙と顎骨片はUMUT130099と部位が重複したことからUMUT130098に、その他の歯牙と頭骨片はUMUT130098と部位が重複したことからUMUT130099に属すると判断された。平箱内の左上腕骨はUMUT130099と部位が重複したことからUMUT130098に属すると判断された(以上は諏訪・高橋の個体分け、同定による)。

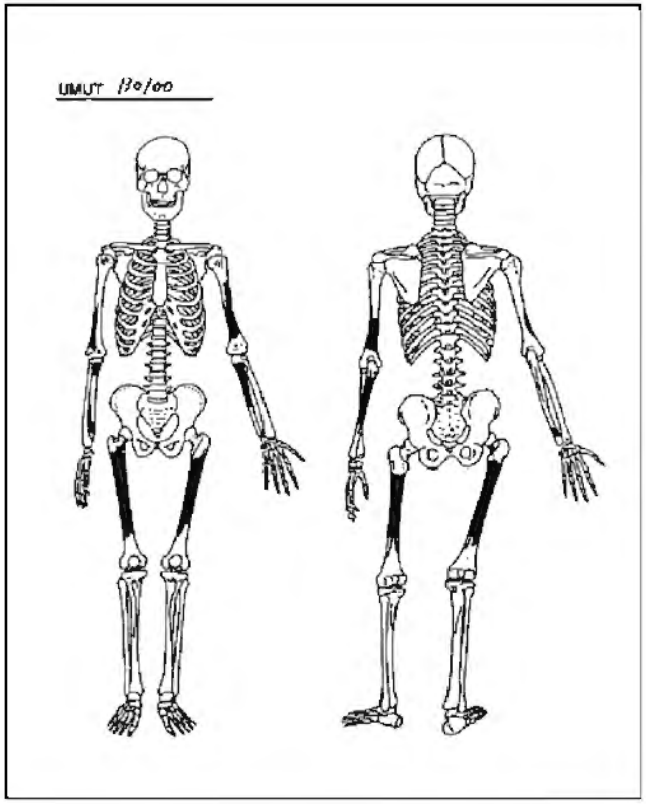


頭骨ケース

頭骨ケースなし

平箱

UMUT	130100	小金井(KG)番号	
遺跡名称	辺田、向ノ台貝塚	長谷部(HS)番号	
時代		鈴木(SZ)番号	
標本名	辺田3	埴原(HN)番号	1321・128
		馬場(BB)番号	
カタログ備考	postcranial bones, fragments. 1321・128(HN).		
出土報告文献	千葉県立千葉中学校校友会(1947)、武田(1953)		
出土報告番号			
発掘調査者	東京大学人類学教室(酒詰仲男ら)、県立千葉中学校郷土研究会		
発掘調査地区			
実測図			
写真			
年代情報			
人骨記載報告	青沼・松村(2000)、本報告書		
頭骨	なし	歯の有無	なし
性別			
歯牙萌出状況			
骨端癒合状況			
特記事項			
整理日	2006.6.1/2006.9.12	整理者	水嶋/水嶋
整理備考	・発掘時のものと思われる付属紙片に「辺田貝塚 第3号人骨」と記されている。		



頭骨ケース

頭骨ケースなし

平箱

UMUT	130101	小金井(KG)番号	
遺跡名称	辺田、向ノ台貝塚	長谷部(HS)番号	
時代		鈴木(SZ)番号	
標本名	辺田4	埴原(HN)番号	1321・130
		馬場(BB)番号	

カタログ備考　limb bones, fragments. 1321・130(HN). 住居跡上より出土 原番号なし

出土報告文献　千葉県立千葉中学校校友会(1947)、武田(1953)

出土報告番号

発掘調査者　東京大学人類学教室(酒詰仲男ら)、県立千葉中学校郷土研究会

発掘調査地区

実測図

写真

年代情報

人骨記載報告　青沼・松村(2000)、本報告書

頭骨　なし　　歯の有無　あり

性別

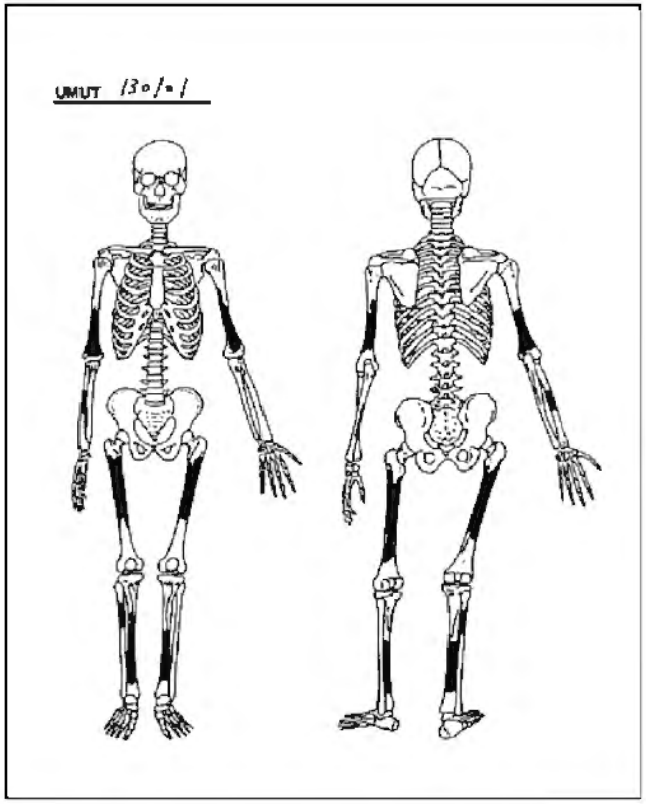
歯牙萌出状況

骨端癒合状況

特記事項

整理日　2006.6.1/2006.9.12　　整理者　水嶋/水嶋

整理備考　歯:M×1
・埴原カード1321・130に「住居跡上より出土」と記されている。



頭骨ケース

頭骨ケースなし

平箱

UMUT	131159	小金井(KG)番号	
遺跡名称	草刈場貝塚、草刈場貝塚	長谷部(HS)番号	
時代		鈴木(SZ)番号	
標本名	草刈場('42)1	埴原(HN)番号	
		馬場(BB)番号	

カタログ備考　2 individuals, fragments. A地点第1区第1号。「左前腕に装嵌された貝輪1個共にあり」together with animal bones.

出土報告文献　酒詰(1951、2001)

出土報告番号

発掘調査者　酒詰仲男、和島誠一、中島寿雄ほか

発掘調査地区

実測図

写真

年代情報

人骨記載報告

頭骨　平箱　　歯の有無　あり

性別　男×1、女×1

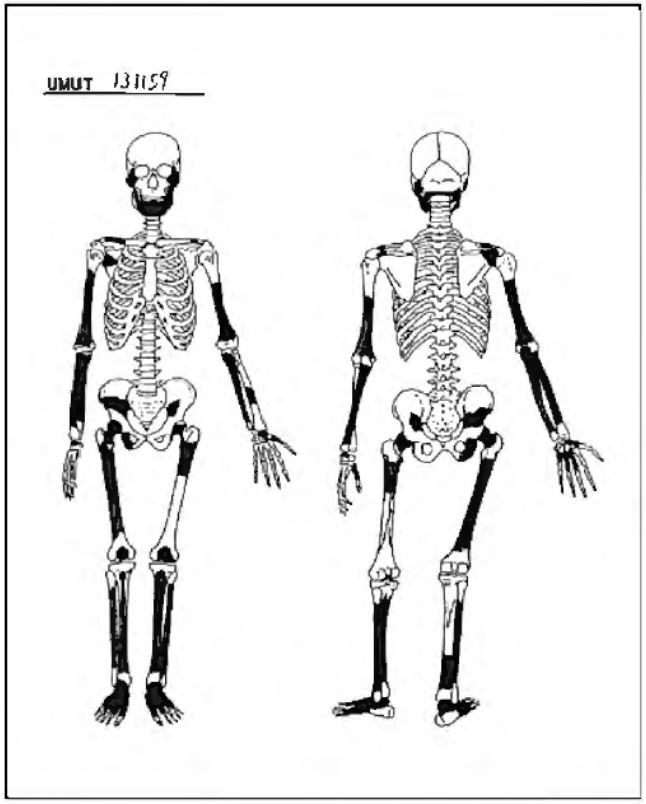
歯牙萌出状況　重複(6+、6+)

骨端癒合状況　prox femur 18+

特記事項

整理日　2003.9.18/2004.3.17　　整理者　桑村/水嶋

整理備考　歯:I×2、C×1、P×6、M×9、不明×2(ただし2個体分の重複、M×1の混入)
・付属紙片に「七月十五日 草刈場 A地点 第一区 第一号人骨」と記されている。
・下顎骨の重複から少なくとも2個体分あり。
・胎児の左大腿骨片、下顎大臼歯×1が混入。



頭骨ケース

頭骨ケースなし

平箱

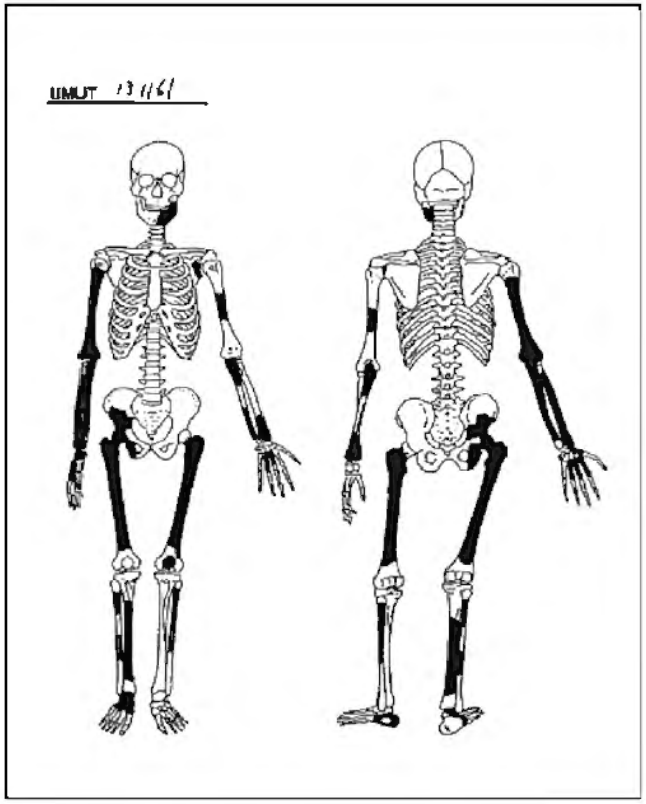
UMUT	131161	小金井(KG)番号	
遺跡名称	草刈場貝塚、草刈場貝塚	長谷部(HS)番号	
時代		鈴木(SZ)番号	
標本名	草刈場('42)3	埴原(HN)番号	
		馬場(BB)番号	

カタログ備考　individual, damaged. ♂estm. age: 25-29y (KB). A地点第2区第3号人骨

出土報告文献	酒詰(1951、2001)
出土報告番号	
発掘調査者	酒詰仲男、和島誠一、中島寿雄ほか
発掘調査地区	
実測図	
写真	
年代情報	
人骨記載報告	
頭骨	平箱　　歯の有無　あり
性別	
歯牙萌出状況	6+
骨端癒合状況	dist radius 19+
特記事項	
整理日	2003.9.25/2004.3.18　　整理者　桑村/水嶋

整理備考

歯:P×1、M×3
・再整理当初、標本には「七月十九日 草刈場 A地点 第二区第三号人骨」「第六号人骨」と記された2つの紙片が付属しており、保存状態から判断して主要2個体分の人骨が収められていた。一方の個体の大腿骨には「草刈場3号」と記されていることから、これを131161と判断した。他方の個体は主に右大腿骨、右脛骨、右腓骨から構成されている。酒詰仲男による実測図と出土状況写真(保存資料)から判断して、この個体は発掘時の第6号人骨と考えられる。ここでは131161の第2個体とした。
・右第2中手骨の重複から少なくとも2個体あり。また大腿骨片が混入。



頭骨ケース

頭骨ケースなし

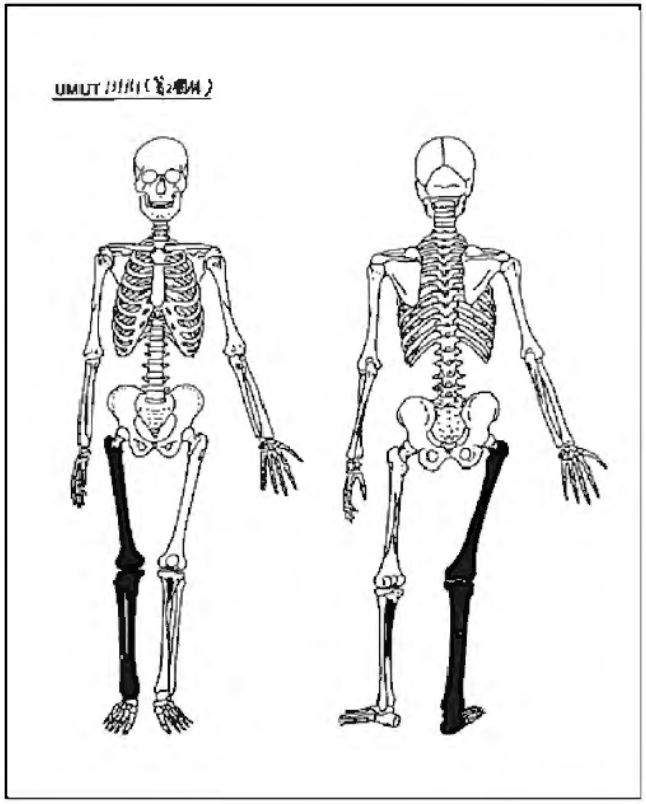
平箱

UMUT	131161(第2個体)	小金井(KG)番号	
遺跡名称	草刈場貝塚、草刈場貝塚	長谷部(HS)番号	
時代		鈴木(SZ)番号	
標本名	草刈場('42)3	埴原(HN)番号	
		馬場(BB)番号	

カタログ備考　individual, damaged. ♂estm. age: 25-29y (KB). A地点第2区第3号人骨

出土報告文献	酒詰(1951、2001)
出土報告番号	
発掘調査者	酒詰仲男、和島誠一、中島寿雄ほか
発掘調査地区	
実測図	保存資料
写真	保存資料
年代情報	
人骨記載報告	
頭骨	なし　　歯の有無　なし
性別	
歯牙萌出状況	6+
骨端癒合状況	prox fibula 18+
特記事項	
整理日	2003.9.25/2004.3.18　　整理者　桑村/水嶋

整理備考
・再整理当初、標本には「七月十九日 草刈場 A地点 第二区第三号人骨」「第六号人骨」と記された2つの紙片が付属しており、保存状態から判断して主要2個体分の人骨が収められていた。一方の個体の大腿骨には「草刈場3号」と記されていることから、これを131161と判断した。他方の個体は主に右大腿骨、右脛骨、右腓骨から構成されている。酒詰仲男による実測図と出土状況写真(保存資料)から判断して、この個体は発掘時の第6号人骨と考えられる。ここでは131161の第2個体とした。



頭骨ケース

頭骨ケースなし

平箱

UMUT	131162	小金井(KG)番号	
遺跡名称	草刈場貝塚、草刈場貝塚	長谷部(HS)番号	
時代		鈴木(SZ)番号	
標本名	草刈場('42)4	埴原(HN)番号	
		馬場(BB)番号	

カタログ備考　individual, damaged. ♂estm. age: 35-39y (KB). A地点第2区第4号 together with animal bones.

出土報告文献　酒詰(1951、2001)

出土報告番号

発掘調査者　酒詰仲男、和島誠一、中島寿雄ほか

発掘調査地区

実測図

写真

年代情報

人骨記載報告

頭骨　平箱　　歯の有無　あり

性別

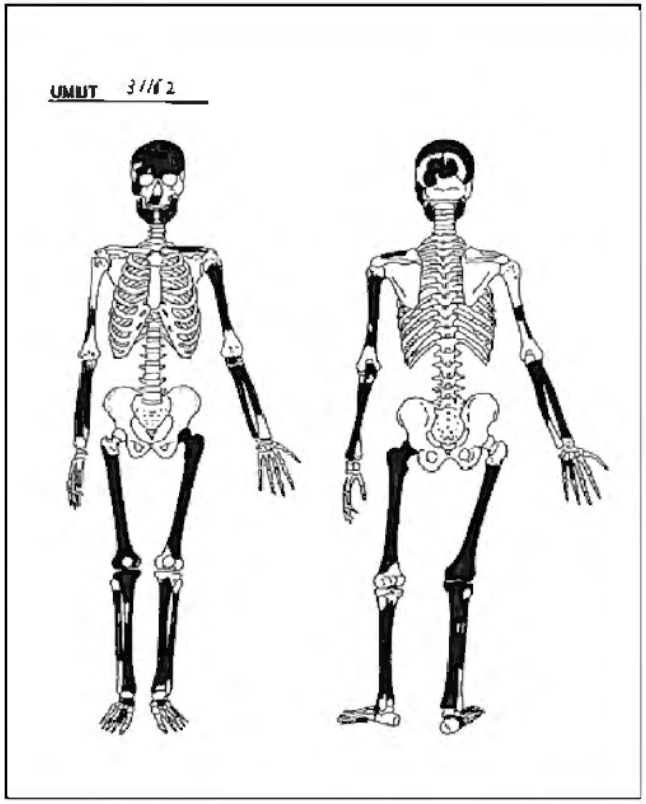
歯牙萌出状況　6+

骨端癒合状況　dist ulna 19+

特記事項

整理日　2003.9.30/2004.3.18　　整理者　桑村/水嶋

整理備考　歯:P×2、M×6



頭骨ケース

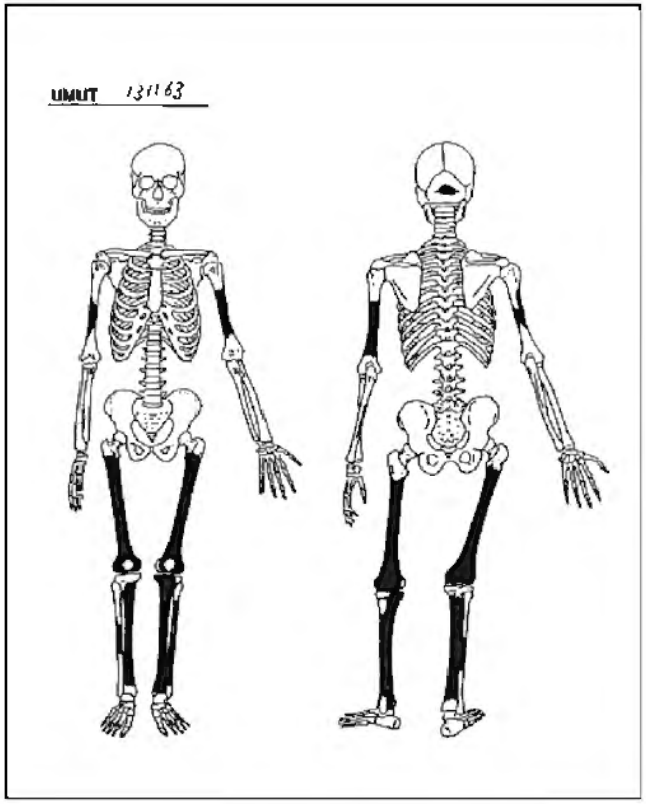
頭骨ケースなし

平箱

UMUT	131163	小金井(KG)番号	
遺跡名称	草刈場貝塚、草刈場貝塚	長谷部(HS)番号	
時代		鈴木(SZ)番号	
標本名	草刈場('42)5	埴原(HN)番号	1321・133
		馬場(BB)番号	

カタログ備考　以下原番号なし individual, damaged. 1321・133 (HN).

出土報告文献	酒詰(1951、2001)
出土報告番号	
発掘調査者	酒詰仲男、和島誠一、中島寿雄ほか
発掘調査地区	
実測図	保存資料
写真	保存資料
年代情報	
人骨記載報告	
頭骨	平箱　　歯の有無　あり
性別	
歯牙萌出状況	6+
骨端癒合状況	dist femur 18+
特記事項	
整理日	2003.9.30/2004.3.18　　整理者　桑村/水嶋
整理備考	歯:I×3、C×2、P×2、M×3 ・酒詰仲男による実測図と出土状況写真(保存資料)から判断して、この個体は発掘時の第5号人骨と考えられる。

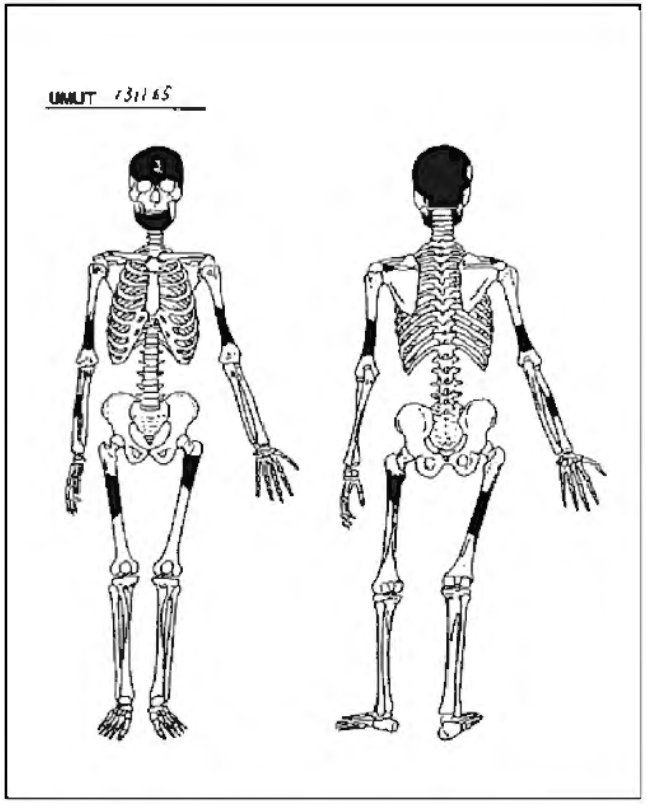


頭骨ケース

頭骨ケースなし

平箱

UMUT	131165	小金井(KG)番号	
遺跡名称	草刈場貝塚、草刈場貝塚	長谷部(HS)番号	
時代		鈴木(SZ)番号	
標本名	草刈場	埴原(HN)番号	1321・138
		馬場(BB)番号	
カタログ備考	skull. 1321・138 (HN). 日本人類学会発掘 原番号なし		
出土報告文献			
出土報告番号			
発掘調査者			
発掘調査地区			
実測図			
写真			
年代情報			
人骨記載報告			
頭骨	頭骨ケース	歯の有無	なし
性別			
歯牙萌出状況	6+		
骨端癒合状況			
特記事項			
整理日	2003.10.14/2004.3.24	整理者	桑村/水嶋
整理備考	・再整理当初、131165は頭骨ケース内の標本のみと考えられていた。その後、「学会発掘 草刈場?」と記された紙片の付属する標本を新たに平箱から特定した。平箱内のケースには白墨で「259」と記されており、この番号は本館所蔵の埴原カード、1321・138にも記されている。以上から、これら平箱内の標本が本標本に属すると判断し、ここに併せて記した。 ・平箱内の下顎骨を頭骨ケースへと移した。		



頭骨ケース

平箱

UMUT	131792	小金井(KG)番号	
遺跡名称	矢作貝塚、矢作貝塚	長谷部(HS)番号	
時代		鈴木(SZ)番号	
標本名	矢作2	埴原(HN)番号	1321・103
		馬場(BB)番号	

カタログ備考　limb bones, fragments. femur, complete. ♀ estm. age: 15-19y(KB). 1321・103(HN).

出土報告文献　武田(1938)、人類学雑誌の雑報(1944)、酒詰(2001)、保存資料

出土報告番号　2号人骨

発掘調査者　東京帝国大学人類学教室(鈴木尚・酒詰仲男ら)

発掘調査地区　A地点(武田, 1938)

実測図

写真　武田(1938)、保存資料

年代情報

人骨記載報告

頭骨　なし　　歯の有無　なし

性別　女性

歯牙萌出状況

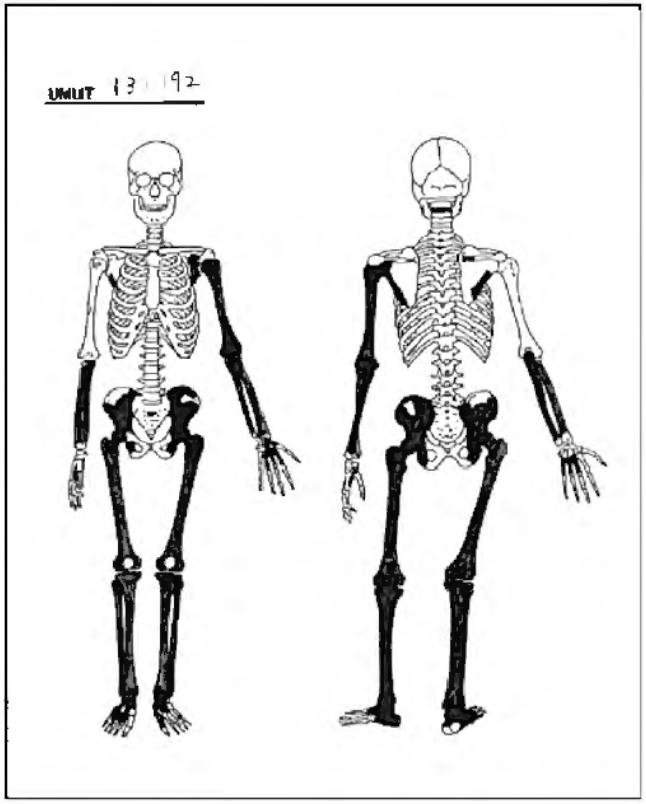
骨端癒合状況　19(prox humerus, prox femur)

特記事項

整理日　2004.3.4/2006.3.9　　整理者　久保/水嶋

整理備考

・発掘時のものと思われる付属紙片に「矢作貝塚 第Ⅰ区人骨七体中 第2号 昭和十九年五月一日」と記されている。
・右第2中足骨の重複から少なくとも2個体あり。また胎児の四肢骨片が混入。
・幼年から若年に属すると思われる椎骨片、指骨等が本標本に収められていた。これらは同じ平箱内のUMUT131793とサイズや保存状態が類似することから、そちらに移した。
・UMUT131802から131810が収められている平箱内に左橈骨が収められていたが、これは本標本の左尺骨とサイズや形態特徴が矛盾しないことから、こちらに移した。
・UMUT131827に収められていた右橈骨は上記の左橈骨と形態特徴が類似することから、こちらに移した。
・発掘状況写真との照合などにより本標本を発掘時の第2号人骨と判断した。
・UMUT131813の頭骨標本は、「第Ⅰ区人骨七体中 第2号」という付属紙片をともなうこと、下顎骨に「矢作2」と記されていること、歯牙萌出状況より若年と考えられることから、本標本(矢作2)の頭部に当たると考えられる。



頭骨ケース

頭骨ケースなし

平箱

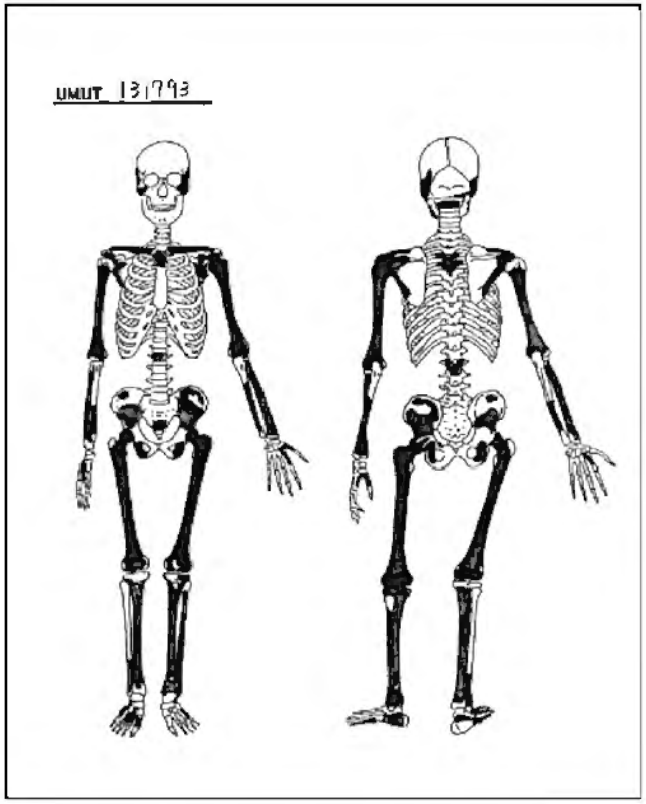
UMUT	131793	小金井(KG)番号	
遺跡名称	矢作貝塚、矢作貝塚	長谷部(HS)番号	
時代		鈴木(SZ)番号	
標本名	矢作3	埴原(HN)番号	
		馬場(BB)番号	

カタログ備考　postcranial bones, damaged. estm. age: ca10-14y(KB).

出土報告文献	武田(1938)、人類学雑誌の雑報(1944)、酒詰(2001)、保存資料
出土報告番号	3号人骨
発掘調査者	東京帝国大学人類学教室(鈴木尚・酒詰仲男ら)
発掘調査地区	A地点(武田, 1938)
実測図	
写真	武田(1938)
年代情報	
人骨記載報告	
頭骨	平箱　　歯の有無　なし
性別	
歯牙萌出状況	
骨端癒合状況	pelvis primary elements 13-
特記事項	
整理日	2004.3.4/2006.3.9　　整理者　久保/水嶋

整理備考

・発掘時のものと思われる付属紙片に「矢作貝塚 第Ⅰ区人骨七体中 第3号 昭和十九年五月 二日」と記されている。
・脛骨近位端、指骨、椎骨等が混入。椎骨の形態特徴と保存状態から判断して主要個体以外に少なくとも3個体分の混入がある。
・幼年から若年に属すると思われる椎骨片、指骨等がUMUT131792に収められていた。これらは同じ平箱内の本標本とサイズや保存状態が類似することから、本標本に属すると判断してこちらに移した。
・UMUT131792(矢作2)、131794(矢作4)、131795(矢作5)、131796(矢作6)、131797(矢作7)は、発掘状況写真との照合などにより各々発掘時の2号、4号、5号、6号、7号人骨と判断した。これらの発掘時番号は本館における標本名と一致していることから、本標本(矢作3)は発掘時の3号人骨に相当すると考えられる。



頭骨ケース

頭骨ケースなし

平箱

UMUT	131794	小金井(KG)番号	
遺跡名称	矢作貝塚、矢作貝塚	長谷部(HS)番号	
時代		鈴木(SZ)番号	矢作10
標本名	矢作4	埴原(HN)番号	1321・105
		馬場(BB)番号	

カタログ備考　individual, fragments. ♂ estm. age: 30-34y(KB). 1321・105(HN). 矢作10(SZ). 第1区人骨7体中第4号

出土報告文献　武田(1938)、人類学雑誌の雑報(1944)、酒詰(2001)、保存資料

出土報告番号　4号人骨

発掘調査者　東京帝国大学人類学教室(鈴木尚・酒詰仲男ら)

発掘調査地区　A地点(武田, 1938)

実測図

写真　武田(1938)、保存資料

年代情報

人骨記載報告

頭骨　頭骨ケース　　歯の有無　あり

性別

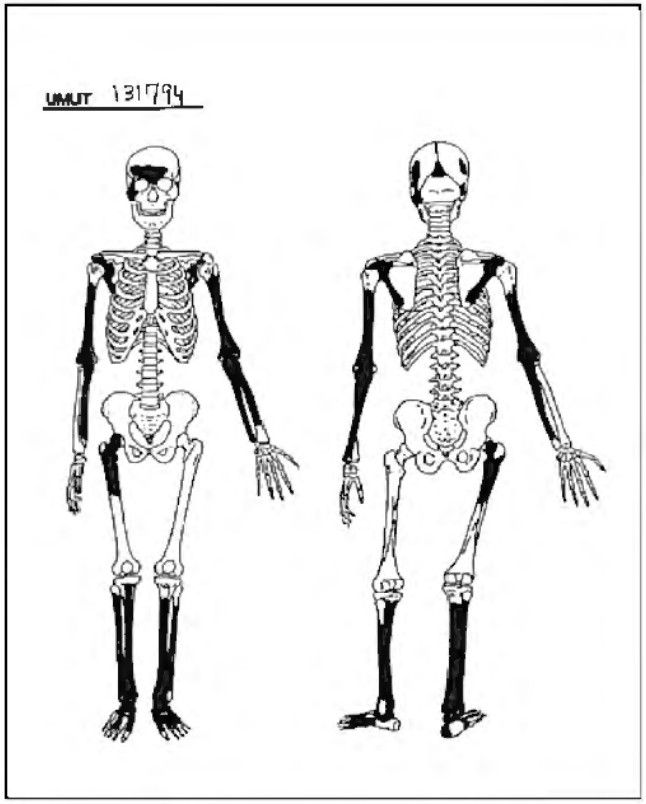
歯牙萌出状況　6+

骨端癒合状況　prox femur 18+

特記事項

整理日　2004.3.12/2006.3.14　　整理者　久保/水嶋

整理備考　歯:I×1、P×6、M×5(ただしP×3、M×3は混入)
・発掘時のものと思われる付属紙片に「矢作貝塚 第Ⅰ区人骨 七体中 第4号 昭和十九年五月 二日」と記されている。
・保存状態の違いから下顎骨(P×3、M×3を含む)を混入とした。また右腓骨が混入。
・UMUT131819の一部頭骨片は本標本と接合したのでこちらに移した。
・UMUT131827に収められていた左右上腕骨遠位部、右尺骨遠位部、左右脛骨内果、右腓骨遠位部は本標本と接合したのでこちらに移した。UMUT131827には1個体に由来すると思われる左尺骨・左橈骨が収められていた。これらのうち左尺骨は本標本の右尺骨と形態特徴が類似することから、上記の左尺骨・左橈骨が本標本に属すると判断してこちらに移した。UMUT131827には1個体に由来すると思われる左右距骨、左右踵骨、足根骨、中足骨が収められていた。左右距骨は本標本の脛骨と矛盾なく関節し、保存状態は互いに類似する。このことから上記の人骨資料が全て本標本に属すると判断してこちらに移した。
・発掘状況写真との照合などにより本標本を発掘時の4号人骨と判断した。



頭骨ケース

平箱

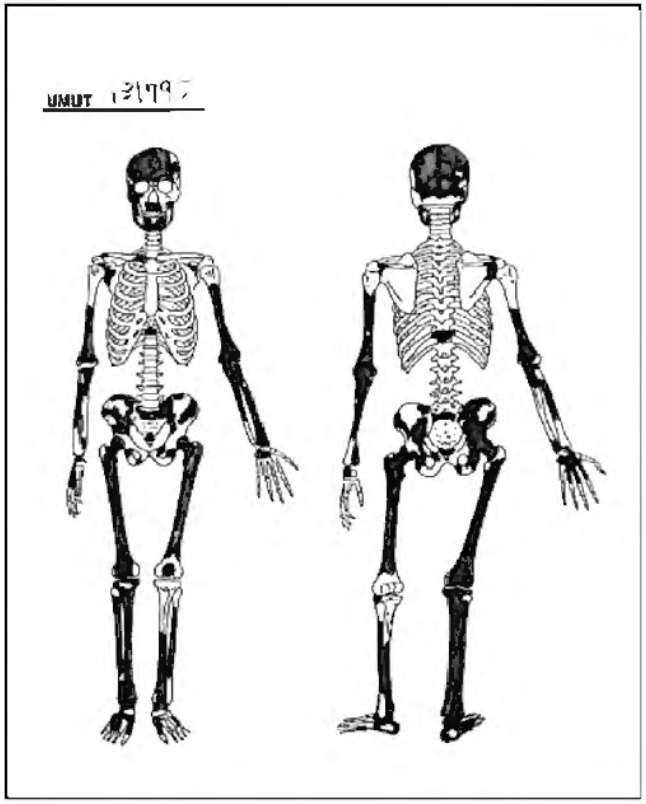
UMUT	131795	小金井(KG)番号	
遺跡名称	矢作貝塚、矢作貝塚	長谷部(HS)番号	
時代		鈴木(SZ)番号	
標本名	矢作5	埴原(HN)番号	1321・106
		馬場(BB)番号	

カタログ備考　individual, fragments. ♀ estm. age: 30–34y(KB). 1321・106(HN).

出土報告文献	武田(1938)、人類学雑誌の雑報(1944)、酒詰(2001)、保存資料
出土報告番号	5号人骨
発掘調査者	東京帝国大学人類学教室(鈴木尚・酒詰仲男ら)
発掘調査地区	A地点(武田, 1938)
実測図	
写真	武田(1938)、保存資料
年代情報	
人骨記載報告	
頭骨	頭骨ケース　　歯の有無　あり
性別	女性
歯牙萌出状況	6+
骨端癒合状況	clavicle sternal end 28+
特記事項	
整理日	2004.4.13/2006.3.14　　整理者　久保/水嶋

整理備考

歯:I×1、P×3、M×3、不明×1
・発掘時のものと思われる付属紙片に「矢作貝塚 第I区人骨 七体中 第5号 昭和十九年五月一日」と記されている。
・右手舟状骨の重複から少なくとも3個体あり。寛骨形態から判断して1体分は女性である。
・若年の椎骨片、仙骨片が混入。
・UMUT131797に左上腕骨、右尺骨遠位部、右腓骨等が収められていたが、本標本と形態特徴やサイズが類似することからこちらに移した。UMUT131797に女性の寛骨が収められていたが、本標本の寛骨片と接合したのでこちらに移した。本標本に収められていた左有鉤骨は、UMUT131797と形態特徴やサイズが類似することから、そちらに移した。
・UMUT131827に収められていた右橈骨・左尺骨は、本標本の左橈骨・右尺骨と形態特徴やサイズが類似することから、こちらに移した。
・発掘状況写真との照合などにより本標本を発掘時の5号人骨と判断した。



頭骨ケース

平箱

UMUT	131796	小金井(KG)番号	
遺跡名称	矢作貝塚、矢作貝塚	長谷部(HS)番号	
時代		鈴木(SZ)番号	
標本名	矢作6	埴原(HN)番号	1321・106
		馬場(BB)番号	

カタログ備考　individual, damaged. ♀ estm. age: 30-34y(KB). 1321・107(HN). 第1区人骨七体中第6号

出土報告文献　武田(1938)、人類学雑誌の雑報(1944)、酒詰(2001)、保存資料

出土報告番号　6号人骨

発掘調査者　東京帝国大学人類学教室(鈴木尚・酒詰仲男ら)

発掘調査地区　A地点(武田, 1938)

実測図

写真　保存資料

年代情報

人骨記載報告

頭骨　平箱　　歯の有無　あり

性別　女性

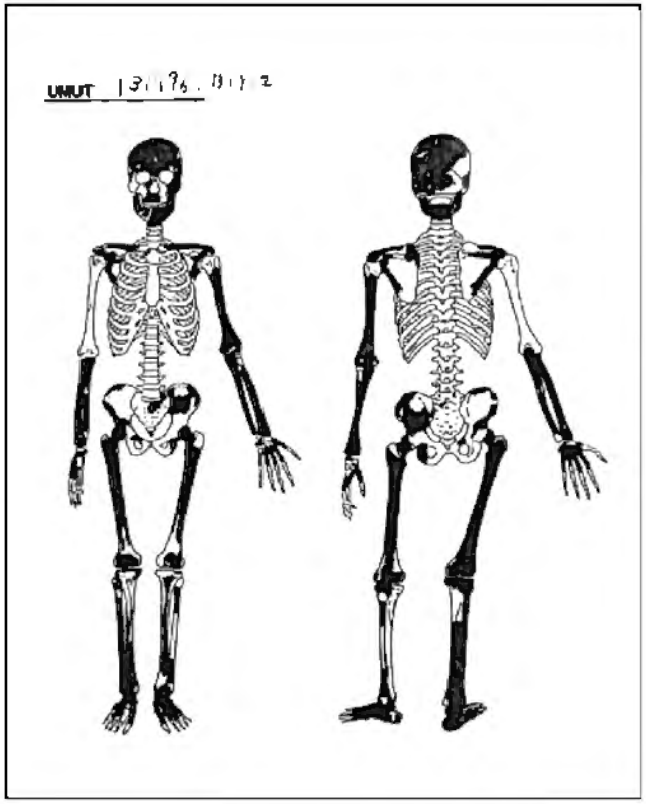
歯牙萌出状況　6+

骨端癒合状況　dist radius 19+

特記事項

整理日　2004.4.27/2006.3.16　　整理者　久保/水嶋

整理備考　歯:I×1、C×1、P×2、M×2、不明×4
・発掘時のものと思われる付属紙片に「矢作貝塚 第Ⅰ区人骨七体中 第6号 昭和十九年五月一日」と記されている。
・左肩甲骨の重複から少なくとも成人3個体あり。
・若年個体の腰椎片が混入。
・本標本の平箱内にはUMUT131822(矢作25)の標本カードが収められており、互いに混在している可能性がある。ここでは平箱内の全ての人骨資料について記録した。
・発掘状況写真との照合などにより本標本を発掘時の6号人骨と判断した。



頭骨ケース

頭骨ケースなし

平箱

UMUT	131797	小金井(KG)番号	
遺跡名称	矢作貝塚、矢作貝塚	長谷部(HS)番号	
時代		鈴木(SZ)番号	
標本名	矢作7	埴原(HN)番号	1321・108
		馬場(BB)番号	

カタログ備考　individual, damaged. ♂ estm. age: 35–39y(KB). 1321・108(HN). 第1区 七体中第7号

出土報告文献　武田(1938)、人類学雑誌の雑報(1944)、酒詰(2001)、保存資料

出土報告番号　7号人骨

発掘調査者　東京帝国大学人類学教室(鈴木尚・酒詰仲男ら)

発掘調査地区　A地点(武田, 1938)

実測図

写真　保存資料

年代情報

人骨記載報告

頭骨　頭骨ケース　　歯の有無　あり

性別　男性

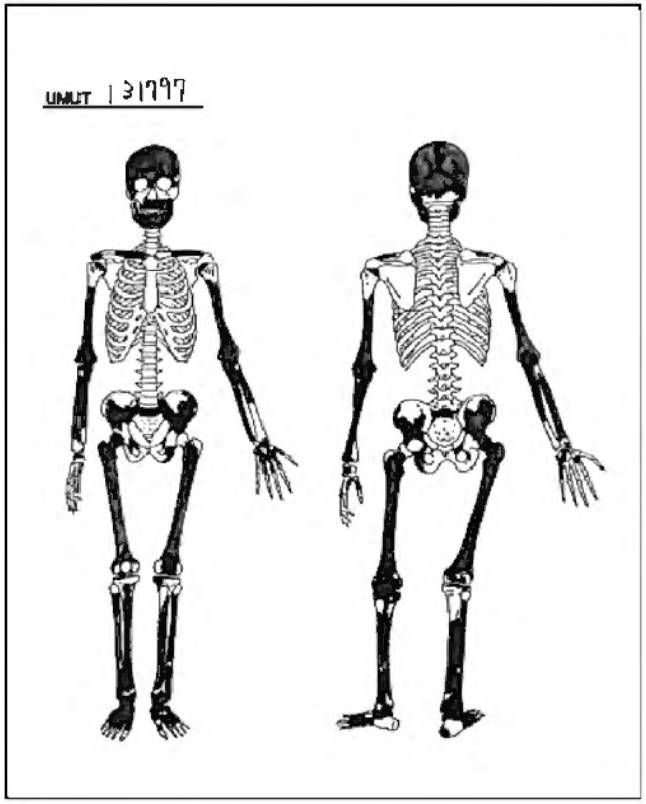
歯牙萌出状況　6+

骨端癒合状況　clavicle sternal end 28+

特記事項

整理日　2004.4.13/2006.3.16　　整理者　久保/水嶋

整理備考　歯:I×7、C×7、P×5、M×12(I×1、C×3、P×1、M×1は混入)
・発掘時のものと思われる付属紙片に「矢作貝塚 第Ⅰ区人骨 七体中 第7号 昭和十九年五月二日」と記されている。胎児骨片が混入。
・本標本には左上腕骨、右尺骨遠位部、右脛骨等が収められていたが、サイズと形態特徴の類似からUMUT131795に属すると判断してそちらに移した。女性の寛骨が収められていたが、UMUT131795の寛骨片と接合したのでそちらに移した。UMUT131795に収められていた左有鉤骨は、サイズと形態特徴の類似から本標本に属すると判断して、こちらに移した。
・1個体に由来すると思われる左右上腕骨、左右尺骨が他所に収められていた。これらのうち左上腕骨は本標本の上腕骨片と接合したことから、上記の人骨資料の全てが本標本に属すると判断してこちらに移した。
・「1321・106」と記された右脛骨が他の平箱に収められていた。この埴原番号から、当初はUMUT131810として考えていたが、本標本の脛骨片と接合したのでこちらに移した。
・発掘状況写真との照合などにより本標本を発掘時の7号人骨と判断した。



頭骨ケース

平箱

UMUT	131813	小金井(KG)番号	
遺跡名称	矢作貝塚、矢作貝塚	長谷部(HS)番号	
時代		鈴木(SZ)番号	矢作
標本名	矢作16	埴原(HN)番号	1321・111
		馬場(BB)番号	

カタログ備考　原番号なし skull, fragments. マウンド人骨。1321・111(HN). 矢作(SZ).

出土報告文献　武田(1938)、人類学雑誌の雑報(1944)、酒詰(2001)、保存資料

出土報告番号　2号人骨

発掘調査者　東京帝国大学人類学教室(鈴木尚・酒詰仲男ら)

発掘調査地区　A地点(武田, 1938)

実測図

写真　武田(1938)、保存資料

年代情報

人骨記載報告

頭骨　頭骨ケース　　歯の有無　あり

性別

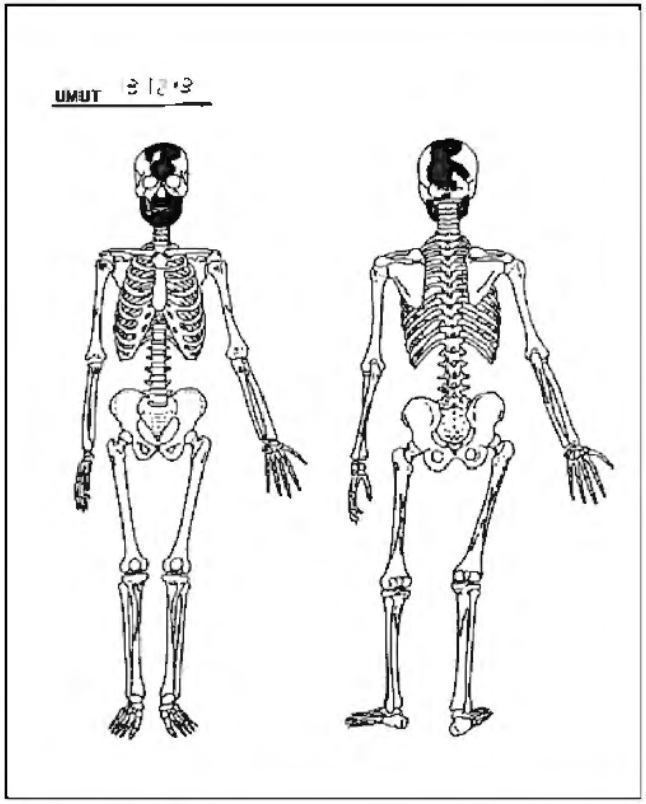
歯牙萌出状況　6+

骨端癒合状況

特記事項

整理日　2004.6.30/2006.4.6　　整理者　久保/水嶋

整理備考　歯:I×5、C×2、P×5、M×9
・発掘時のものと思われる付属紙片に「矢作貝塚 第Ⅰ区人骨 七体中 第2号 昭和十九年五月 二日」「マウンド人骨 八-五」、埴原カード1321・111に「マウンド人骨」と記されている。
・下顎骨に朱文字で「矢作2」と記されている。
・サイズと形態特徴の類似から本標本に属すると思われる上顎左第1切歯がUMUT131827に収められていたので、こちらに移した。
・本頭骨標本は、「第Ⅰ区人骨 七体中 第2号」という付属紙片をともなうこと、下顎骨に「矢作2」と記されていること、歯牙萌出状況より若年と考えられることから、UMUT131792(矢作2)の頭部に当たると考えられる。



頭骨ケース

平箱

平箱なし

UMUT	131825	小金井(KG)番号	
遺跡名称	矢作貝塚、矢作貝塚	長谷部(HS)番号	
時代		鈴木(SZ)番号	
標本名	矢作28	埴原(HN)番号	
		馬場(BB)番号	

カタログ備考　原番号なし infans, fragments. hip bones mixed. 1321・120(HN). 甕棺内人骨

出土報告文献　人類学雑誌の雑報(1944)、酒詰(2001)、保存資料

出土報告番号

発掘調査者　東京帝国大学人類学教室(鈴木尚・酒詰仲男ら)

発掘調査地区

実測図

写真　保存資料

年代情報

人骨記載報告

頭骨　平箱　　歯の有無　あり

性別

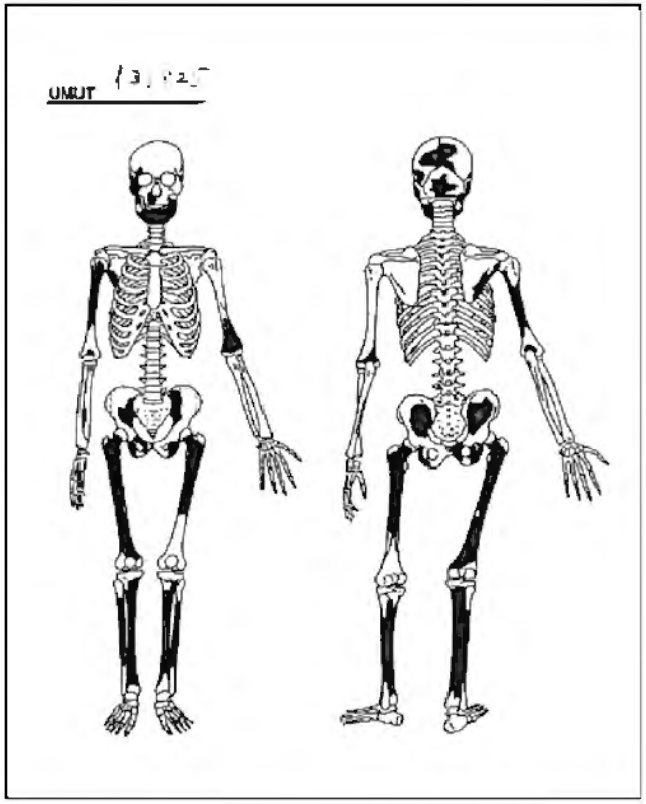
歯牙萌出状況　4 y

骨端癒合状況　pelvis primary elements 13−

特記事項

整理日　2004.3.17/2006.5.2　　整理者　久保/水嶋

整理備考　歯:di×8、dc×4、dm×8、I×5、C×2、P×6、M×8
・発掘時のものと思われる付属紙片に「矢作貝塚 第Ⅲ区人骨(第8号) 昭和十九年五月一日」と記されている。
・発掘状況写真との照合などにより本標本を発掘時の8号人骨と判断した。



頭骨ケース

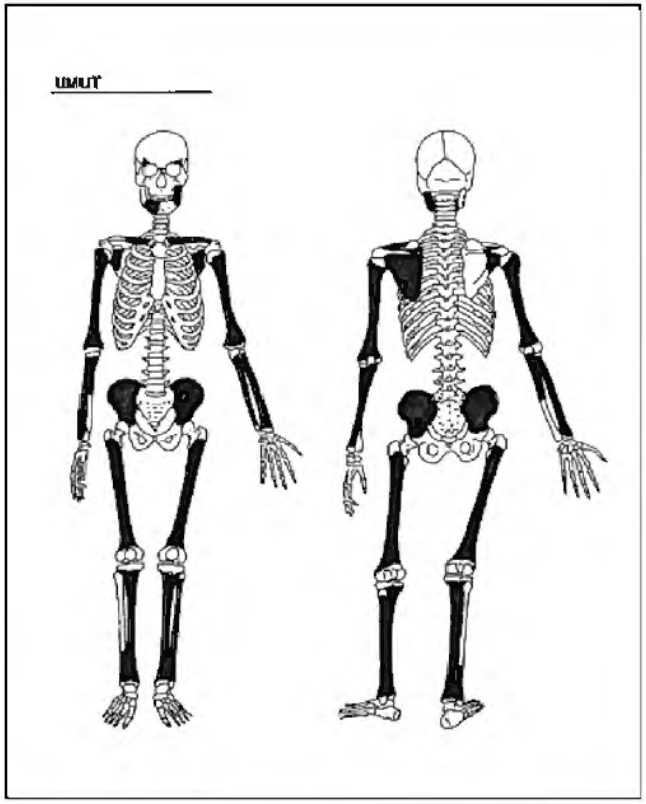
頭骨ケースなし

平箱

UMUT	なし	小金井(KG)番号	
遺跡名称	未登録、加曽利貝塚	長谷部(HS)番号	
時代	縄文後期前葉～晩期	鈴木(SZ)番号	
標本名	加曽利南15	埴原(HN)番号	
		馬場(BB)番号	

カタログ備考

出土報告文献	後藤(1976)
出土報告番号	第15号
発掘調査者	加曽利貝塚調査団(団長 滝口宏)
発掘調査地区	第VIトレンチ-3区(後藤, 1976)
実測図	
写真	
年代情報	後期中葉、加曽利B式(後藤, 1976)
人骨記載報告	
頭骨	平箱　　歯の有無　あり
性別	
歯牙萌出状況	0
骨端癒合状況	pelvis primary elements 13-
特記事項	
整理日	2005.1.27/2005.1.27　　整理者　金森/水嶋
整理備考	歯:di×5、dm×1 ・胎児～新生児の左上腕骨が混入。 ・付属紙片に「人骨 第15号 1964. 9. 25 第6トレンチ 66-47」と記されている。ここでは発掘時の第15号人骨と判断して記した。

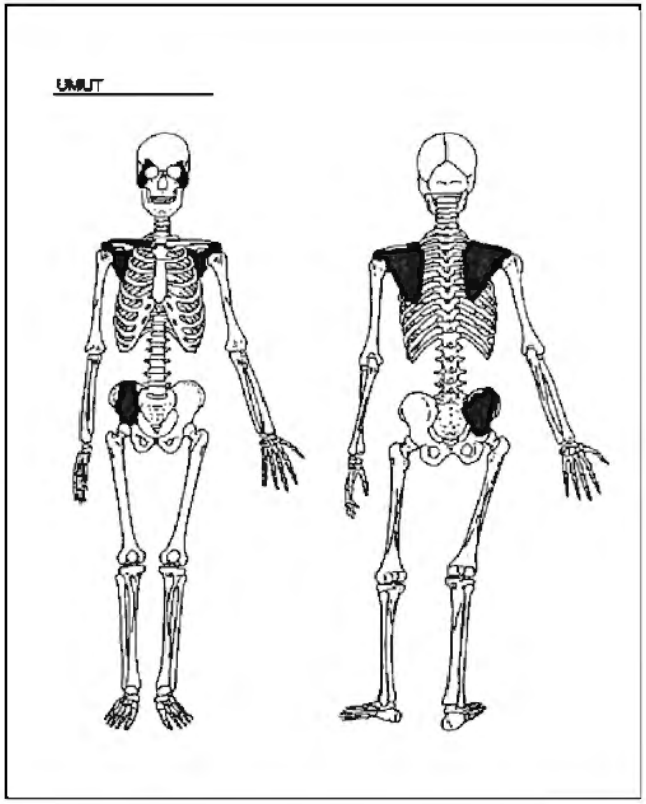


頭骨ケース

頭骨ケースなし

平箱

UMUT	なし	小金井(KG)番号	
遺跡名称	未登録、加曽利貝塚	長谷部(HS)番号	
時代	縄文後期前葉～晩期	鈴木(SZ)番号	
標本名	加曽利南20	埴原(HN)番号	
		馬場(BB)番号	
カタログ備考			
出土報告文献	後藤(1976)		
出土報告番号	第20号		
発掘調査者	加曽利貝塚調査団(団長 滝口宏)		
発掘調査地区	第VIトレンチ-3区(後藤, 1976)		
実測図			
写真			
年代情報	後期中葉、加曽利B式(後藤, 1976)		
人骨記載報告			
頭骨	平箱	歯の有無	あり
性別			
歯牙萌出状況	6 months		
骨端癒合状況	pelvis primary elements 13-		
特記事項			
整理日	2005.1.27/2005.1.27	整理者	金森/水嶋
整理備考	歯:di×7、dc×4、dm×8 ・付属紙片に「第6 tre 3区 66-46 第20号人骨 10/19 南20(木村命名)」と記されている。ここでは発掘時の第20号人骨と判断して記した。		

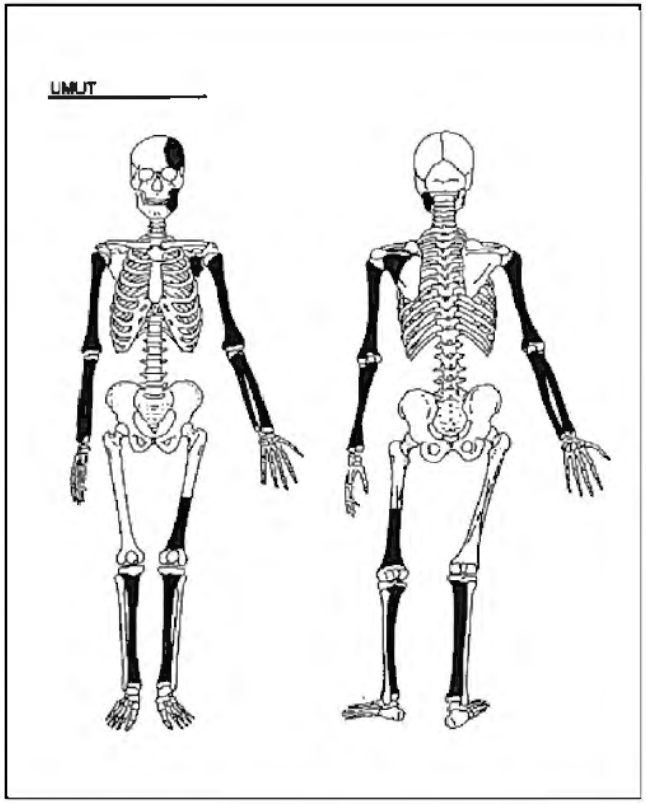


頭骨ケース

頭骨ケースなし

平箱

UMUT	なし	小金井(KG)番号	
遺跡名称	未登録、加曽利貝塚	長谷部(HS)番号	
時代	縄文後期前葉～晩期	鈴木(SZ)番号	
標本名	加曽利南21	埴原(HN)番号	
		馬場(BB)番号	
カタログ備考			
出土報告文献	後藤(1976)		
出土報告番号	第21号		
発掘調査者	加曽利貝塚調査団(団長 滝口宏)		
発掘調査地区	第Ⅳトレンチー2区(後藤, 1976)		
実測図			
写真	「加曽利南貝塚」(1976)、保存資料		
年代情報	後期前葉、堀之内1式(後藤, 1976)		
人骨記載報告			
頭骨	平箱	歯の有無	なし
性別			
歯牙萌出状況			
骨端癒合状況	prox ulna 14-		
特記事項			
整理日	2005.1.27/2005.1.27	整理者	金森/水嶋
整理備考	・付属紙片に「千葉 加曽利南 小児骨 南21(木村命名)」と記されている。ここでは発掘時の第21号人骨と判断して記した。		



頭骨ケース

頭骨ケースなし

平箱